

平成11年度 市内遺跡発掘調査に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

Imaino

今井野遺跡群(第4次)

Nobeokajokamachi

延岡城下町遺跡(第1次)

Amorijyonyama

天下城山遺跡(第1次)

Takeshita

竹下遺跡(第2次)

Takeshita

竹下遺跡(第3次)

Yoshino

吉野遺跡(第5次)



JR南延岡機関区

2000.3

延岡市教育委員会

序 文

延岡市は宮崎県の北部に位置し、人口約12万8千人の中核都市として、県内随一、東九州地域においても有数の工業集積地であります。その一方では豊かな自然と歴史を併せ持った都市でもあります。近年は、産業の停滞・人口の減少・高齢化が市の抱える大きな課題となっています。

しかし、県北地域の大きなネックとなっていた道路問題が、国道10号延岡道路の着手や東九州自動車道の延岡・都農間に施工命令、蒲江・北川間が整備計画区間に格上げされるなど、高速道路建設に大きな拍車がかかってきました。

また、念願であった4年制大学「九州保健福祉大学」も開学し、着実に進展を見せております。

こうした地域振興を背景に、大規模な公共工事や民間開発が増加しています。このような状況に対応するため、市教育委員会では開発事業等の計画に際して、埋蔵文化財の確認調査等を実施しており、本書はその報告書であります。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助となることを願うとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり県教育委員会文化課をはじめ、地権者の方々にご協力得ました。記して感謝いたします。

平成12年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 牧 野 哲 久

例 言

1. 本書は延岡市教育委員会が国・県補助を受けて、平成11年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 本年度は竹下遺跡（第2次）、延岡城下町遺跡（第1次）、赤木遺跡（第5次）、竹下遺跡（第3次）、天下城山遺跡（第1次）、吉野遺跡（第4・5・6次）の発掘調査を実施した。
3. 本書に使用した遺構・遺物の実測・トレース・図面作成は、山田 聡、尾方農一、高浦 哲の他、資料整理員があたった。
4. 現場での写真撮影、遺物の写真撮影は山田、尾方、高浦があたった。
5. 竹下遺跡（第2次）出土の遺物については、元国鉄職員鶴島義平氏に助言をいただいた。
6. 方位は磁北を示し、本書に使用したレベルはすべて海拔高である。
7. 出土遺物は内藤記念館で保管しており、今後展示公開の予定である。

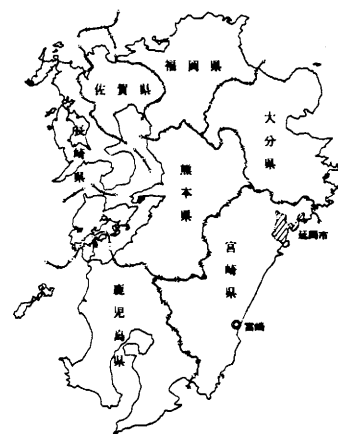


Fig. 1 延岡市位置図

本文目次

第I章 はじめに

- | | | | |
|---------|---|----------|---|
| 1. はじめに | 1 | 2. 調査の記録 | 3 |
|---------|---|----------|---|

第II章 調査の記録

- | | | | |
|-----------------|----|--------------|----|
| 1. 今井野遺跡群(第4次) | 3 | 2. 竹下遺跡(第2次) | 5 |
| 3. 延岡城下町遺跡(第1次) | 9 | 4. 竹下遺跡(第3次) | 27 |
| 5. 天下城山遺跡(第1次) | 28 | 6. 吉野遺跡(第5次) | 31 |

挿 図 目 次

- | | | | |
|----------------------------------|----|----------------------------------|----|
| Fig. 1 延岡市位置図 | | Fig. 2 平成11年度市内遺跡発掘調査遺跡分布図 | 2 |
| Fig. 3 今井野遺跡群(第4次)位置図 | 3 | Fig. 4 今井野遺跡群(第4次)調査区配置図 | 3 |
| Fig. 5 竹下遺跡(第2次)位置図 | 5 | Fig. 6 竹下遺跡(第2次)調査区配置図 | 5 |
| Fig. 7 竹下遺跡(第2次)出土遺物実測図1 | 7 | Fig. 8 竹下遺跡(第2次)出土遺物実測図2 | 8 |
| Fig. 9 延岡城下町遺跡(第1次)位置図 | 9 | Fig.10 延岡城下町遺跡(第1次)調査区配置図 | 10 |
| Fig.11 延岡城下町遺跡(第1次)第1トレンチ遺構分布図 | 11 | Fig.12 延岡城下町遺跡(第1次)第1第3トレンチ土層断面図 | 12 |
| Fig.13 延岡城下町遺跡(第1次)第1トレンチ水路遺構実測図 | 13 | Fig.14 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図1 | 15 |
| Fig.15 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図2 | 16 | Fig.16 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図3 | 17 |
| Fig.17 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図4 | 18 | Fig.18 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図5 | 19 |
| Fig.19 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図6 | 20 | Fig.20 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図7 | 21 |
| Fig.21 竹下遺跡(第3次)位置図 | 27 | Fig.22 竹下遺跡(第3次)調査区配置図 | 27 |
| Fig.23 天下城山遺跡(第1次)位置図 | 28 | Fig.24 天下城山遺跡(第1次)調査区配置図 | 28 |
| Fig.25 天下城山遺跡(第1次)溝状遺構実測図 | 29 | Fig.26 天下城山遺跡(第1次)出土遺物実測図 | 30 |
| Fig.27 吉野遺跡(第5次)位置図 | 31 | Fig.28 吉野遺跡(第5次)調査区配置図 | 32 |
| Fig.29 吉野遺跡(第5次)トレンチ土層断面図 | 32 | | |

表 目 次

- | | | | |
|--------------------------|----|--------------------------|----|
| 第1表 平成11年度市内遺跡発掘調査一覧表 | 1 | 第2表 竹下遺跡(第2次)出土遺物観察表 | 6 |
| 第3表 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物観察表1 | 25 | 第4表 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物観察表2 | 26 |
| 第5表 報告書抄録 | 33 | | |

写真図版目次

- | | | | |
|---------------------------|----|---------------------------|----|
| PL. 1 今井野遺跡群(第4次)空中写真 | 4 | PL. 2 今井野遺跡群(第4次)調査風景 | 4 |
| PL. 3 竹下遺跡(第2次)第1トレンチ土層断面 | 5 | PL. 4 竹下遺跡(第2次)出土遺物 | 8 |
| PL. 5 延岡城下町遺跡(第1次)調査地 | 9 | PL. 6 明治元年前後延岡藩士族屋敷図 | 9 |
| PL. 7 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物1 | 19 | PL. 8 延岡城下町遺跡(第1次)調査風景 | 22 |
| PL. 9 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物2 | 23 | PL.10 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物3 | 24 |
| PL.11 竹下遺跡(第3次)調査風景 | 27 | PL.12 天下城山遺跡(第1次)溝状遺構検出状況 | 29 |
| PL.13 天下城山遺跡(第1次)出土遺物 | 30 | PL.14 吉野遺跡(第5次)調査地 | 31 |

第I章 はじめに

1. はじめに

延岡市は、日向灘に面した宮崎県の北部に位置し、東経131度32分45秒～131度50分20秒、北緯32度43分32秒～32度29分11秒の間にあり、面積は283.78km²である。人口は12万8千人を数え、宮崎県北部の中核都市であり、また県下最大の工業集積地である。

これまで工業都市として認識されてきた本市であるが、「内藤家伝来の能面展」や「のべおか天下一薪金」等の開催により、文化都市のべおかとしても認識されてきた。

現在の延岡市は、念願だった4年制大学「九州保健福祉大学」の開学、「国道延岡道路」の着手、東九州自動車道の延岡・都農間施工命令、蒲江・北川間の整備計画格区間格上げなど、これまでの大きな課題であった道路問題に対しても大きく前進している。このような背景のなか、公共・民間を問わず開発事業が増加し、それに伴い埋蔵文化財の調査も増加している。

今年度の調査は民間事業に伴うものが主であり、これら開発事業と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために、下記の8箇所を確認・試掘調査を実施した。なお、昨年度末の平成11年3月15日、3月17日に蓬萊山善龍寺跡・今井野遺跡群（第5次）の立ち会いを実施した。同じく昨年度末に調査した今井野遺跡群（第4次）を巻頭に報告し、赤木遺跡（第5次）は本調査を行ったため別巻にて報告する。また、吉野遺跡（第4・6次）は年度末調査であることから割愛させていただき次年度報告とする。

遺 跡 名	所在地（延岡市）	調 査 原 因	調査面積	調 査 期 間
今井野遺跡群(第4次)	天下町字今井野	防災工事	232㎡	平成11年2月10日～22日
竹下遺跡(第2次)	浜町字竹下	宅地造成	160㎡	平成11年4月20日～22日
延岡城下町遺跡(第1次)	南町字南町	商業ビル建設	136㎡	平成11年5月11日～6月2日
赤木遺跡(第5次)	舞野町字赤木	携帯無線基地局	41.8㎡	平成11年6月24日～7月2日
竹下遺跡(第3次)	浜町字竹下	宅地造成	72㎡	平成11年11月2日
天下城山遺跡(第1次)	天下町字雨下	携帯無線基地局	50㎡	平成11年11月15日～29日
吉野遺跡(第4次)	吉野町字吉野	宅地造成	124.5㎡	平成12年1月13日～2月25日
吉野遺跡(第5次)	吉野町字吉野	宅地造成	6.5㎡	平成12年1月26日～2月4日
吉野遺跡(第6次)	吉野町字吉野	宅地造成	386㎡	平成12年2月8日～3月7日

第1表 平成11年度 市内遺跡発掘調査一覧表

2. 調査の組織

調 査 主 体

延岡市教育委員会

教 育 長

牧 野 哲 久

文 化 課 長

酒 井 修 平

課長補佐兼文化財係長

渡 邊 博 吏

副主幹兼文化振興係長

黒 木 育 朗

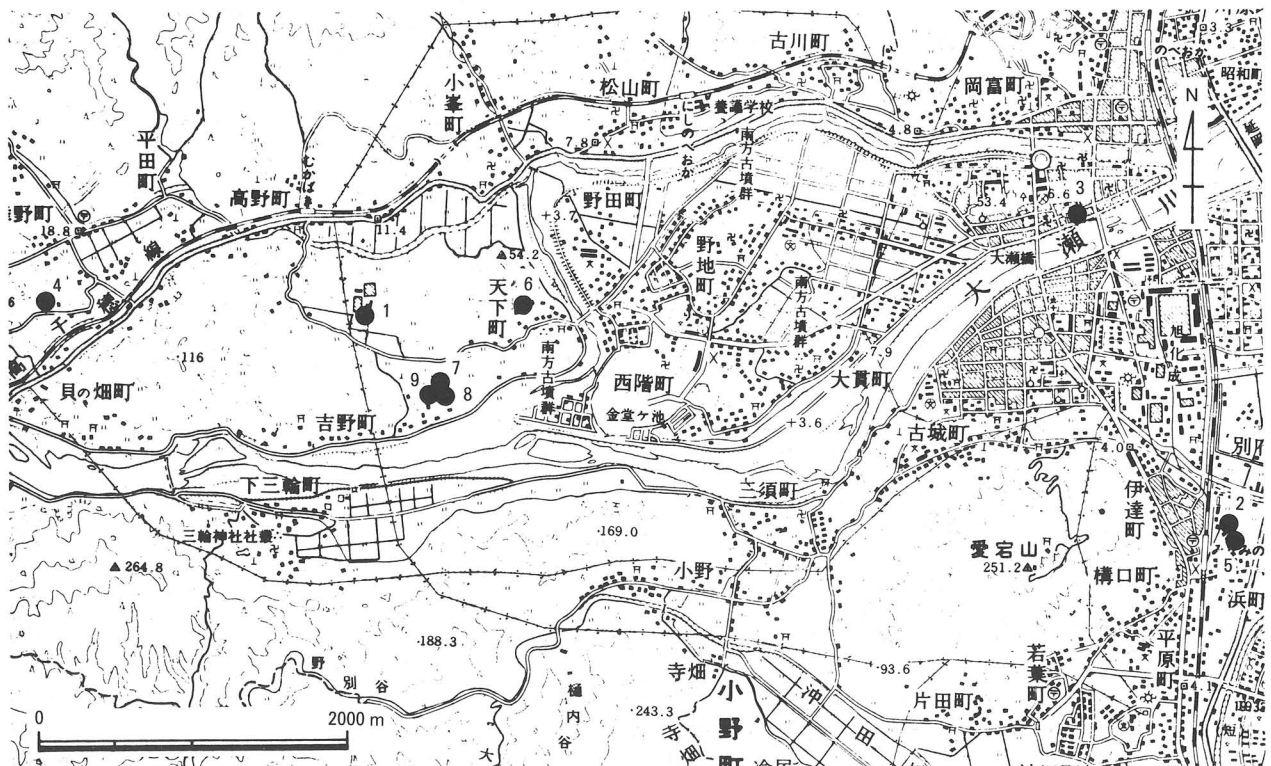
庶務担当 文化課主査 稲田芳子

調査担当 文化課主任主事 山田 聡
文化課主事 尾方 農一
文化課主事 高浦 哲
特別調査員 田野町教育委員会 金丸 武司

発掘作業員 安藤登美子、小野愛子、小田ヒサコ、甲斐カツキ、甲斐 栄、
川名千代子、黒水克哉、工藤今朝子、久保利男、酒井 巖、酒井清子、
酒井正志、関口笑子、津野英之、中島千賀、中川イツ子、中川文夫、
林田裕子、冷水洋子 松崎辰磨、山口奈緒美

資料整理 久米田有美、敷石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子、柳田晴子

発掘調査の事前協議等において、市開発公社に御協力をいただいた。また、土地所有者の日向総合建設株式会社、後藤ゆかり氏、エヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社、株式会社加賀城建設、高橋賢勇氏、高橋一則氏、宮崎県北部農業共済組合の方々には、調査の課程において便宜をはかっていただいた。記して感謝します。



- | | | |
|-----------------|---------------|------------------|
| 1. 今井野遺跡群 (第4次) | 2. 竹下遺跡 (第2次) | 3. 延岡城下町遺跡 (第1次) |
| 4. 赤木遺跡 (第5次) | 5. 竹下遺跡 (第3次) | 6. 天下城山遺跡 (第1次) |
| 7. 吉野遺跡 (第4次) | 8. 吉野遺跡 (第5次) | 9. 吉野遺跡 (第6次) |

Fig. 2 平成11年度 市内遺跡発掘調査 遺跡分布図 (1/50,000)

第Ⅱ章 調査の記録

1. 今井野遺跡群 (第4次)

所在地 宮崎県延岡市天下町1213-209
調査原因 防災工事
調査期間 990210～990222

調査面積 232 m²
担当者 尾方・高浦
処置 盛土保存

(1)位置と環境

当遺跡は、市の西南部に位置し五ヶ瀬川の北に広がる台地上にあたる。周辺には高野貝塚、吉野支群(国史跡南方古墳群)、吉野第1遺跡等が点在する。遺跡の周辺には、過去の記録が数多く残っており、大正から昭和にかけて遺物の採集を行った有馬七蔵は、打製石器、石鏃、弥生土器、須恵器等を採集したとのことであった。近年、消失していたと思われるこの有馬コレクションが発見され、この台地が、古代より人々の生活の営みが行われていたことを裏付ける資料の数々であった。

また、平成元年度の第1次調査・平成5年度の第2次調査により、旧石器～弥生時代の遺構・遺物の存在が確認されている。

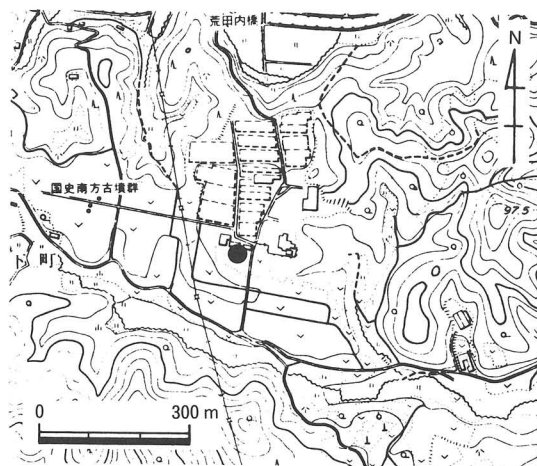


Fig. 3 今井野遺跡群(第4次)位置図(1/15,000)



Fig. 4 今井野遺跡群(第4次)調査区配置図(1/2,000)

(2)調査の概要

調査予定地は、昭和45年から養鶏場が営まれていた。この地を平成10年度に延岡市が買収し、工業団地を造成する計画である。事前の聞き取り調査から、事業の拡張により鶏舎の建て替えや造成などでかなりの土地の改変を行ったとの話を得た。このことから予定地はかなりの攪乱を受けているものと推察された。

調査はトレンチ法を採用し、4箇所を設定し実施した。トレンチ1は、上記の話を裏付けるように、産業廃棄物が大量に検出された。予定地中間に設定したトレンチ3では、良好な土層堆積を確認するとともに、溝状遺構1状・柱穴4を検出した。時代については供伴する遺物がないこと、トレンチ調査であることから詳細はつかめなかった。トレンチ4からも良好な土層堆積を確認するとともに、柱穴8を検出した。また、地表下約2.6mから河岸段丘礫が確認され、近流する五ヶ瀬川の旧河川道と判断された。

以上の結果から、予定地に埋蔵文化財が確認され本調査が必要であるが、今回の開発計画はこの跡地の地形上の問題から起こっている雨水の防災工事、応急的な盛土計画であることから、本格的に工業団地造成を実施する前に本調査を行うこととした。

(3)検出遺構

トレンチ3より溝状遺構1状・柱穴4を検出したが、トレンチ調査、供伴遺物がないことから時代、性格については詳細は不明である。また、トレンチ4からも柱穴8を検出した。トレンチ4の地表下約2.6mから河岸段丘礫が確認された。

(4)出土遺物

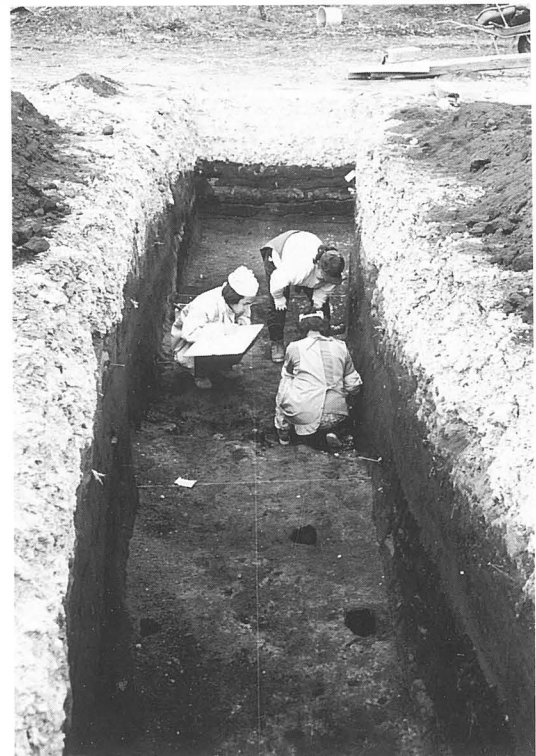
縄文土器片数点。

(5)ま と め

今回の調査により、溝状遺構1状・柱穴12を検出したが、過去の記録から予想されていた程の成果が得られなかったことは残念である。今後は今回の調査地を含め、予定されている工業団地造成の開発に際し慎重な対応が必要である。



PL.1 今井野遺跡群(第4次)空中写真



PL.2 今井野遺跡群(第4次)調査風景

2. 竹下遺跡 (第2次)

所在地 宮崎県延岡市浜町172-13外
調査原因 宅地造成
調査期間 990420～990422

調査面積 160 m²
担当者 尾方・高浦
処置 破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、標高251.2mを測る愛宕山の東裾に広がる水田地帯の一角に位置し、西側にはJR南延岡駅が所在する。このJR南延岡駅構内には大正15年の日豊本線開通と同時に完成した扇形車庫や転車台(九州内には門司駅と豊後森駅のみ)等の施設が残っている。

また、この地域では、近世有馬時代に播州赤穂藩から日吉、山本、片伯部、上田、大山といった製塩技術者による製塩作業が行われていた。

元禄5年(1692)に下野国(栃木県)より三浦氏が転封してくると、水田の少なかったこの地域を開発するために岩熊井堰の建設が計画され、度重なる困難を乗り越えた末、享保19年(1734)に完成し、現在の水田地帯を開拓したのである。今でも調査地の一角にこの用水路が確認できる。

また、この周辺においては平成9年度に試掘調査を実施しており、近代の水田面・周辺を流れる浜川の旧河道を確認している。

(2)調査の概要

調査対象地は、以前JRの所有地であり聞き取りからレールの敷石や、石炭ガラを埋土しているということであった。調査は重機によるトレンチ調査法で行うとともに、一部面的な調査を行った。調査の結果、地表下約1.3mは客土による盛土層が確認され、その下層からは近代の水田面が検出された。また、約2m下の層からは大量の湧水がみられた。

(3)検出遺構

近代の水田面を検出した。

(4)出土遺物

以前、JRの所有地であったことから、昭和40年代に使用、廃棄された数多くの汽車土瓶等が出土した。

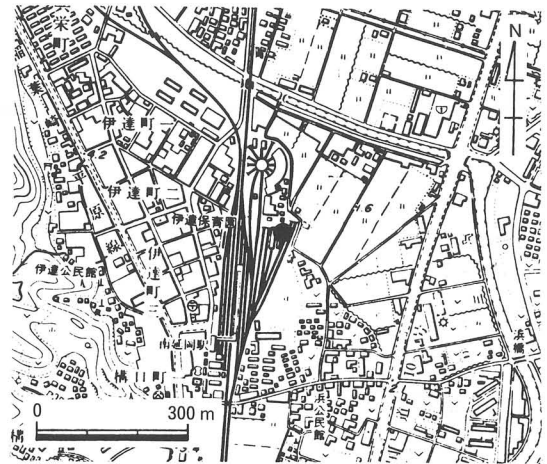
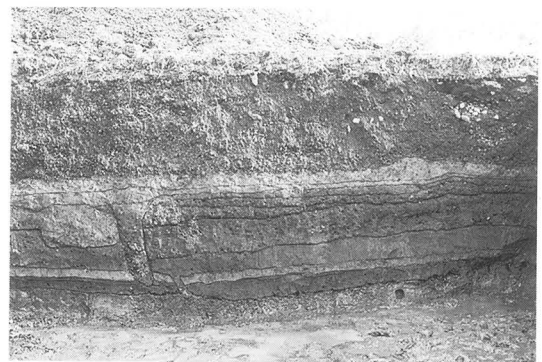


Fig. 5 竹下遺跡(第2次)位置図(1/15,000)



Fig. 6 竹下遺跡(第2次)調査区配置図(1/5,000)



PL. 3 竹下遺跡(第2次)第1トレンチ土層断面

No	器種	口径・器高・底径 (cm)			文様・技法の特徴
1	茶瓶蓋 (兼湯飲)	5.3	2.8	3.6	底部を除く内外面に灰釉。底部に動輪紋。
2	茶瓶蓋 (兼湯飲)	5.0	3.0	2.3	機械ロクロ。糸切り底。内面・口縁部のみ鉄釉。
3	茶瓶蓋 (兼湯飲)	6.2	3.0	3.5	内面のみ灰釉。
4	握手付四角茶瓶	4.0	8.1	7.0	鋳込み底部対角線に継跡。口縁と底部を除き器内外に灰釉。胴部に「動輪紋」とその対角に「焚口紋」を現す。
5	握手付四角茶瓶	4.0	8.7	7.0	鋳込み底部対角線に継跡。口縁と底部を除き器内外に灰釉。胴部に「動輪紋」を現す。
6	注口付吊下げ八角茶瓶	4.0	7.8	7.3	鋳込み底部対角線に継跡。口縁と底部を除き器内外に灰釉。胴部に「名古屋松浦」とその対角に「お茶」の文字。
7	注口付吊下げ八角茶瓶	4.0	7.5	7.2	鋳込み底部対角線に継跡。口縁と底部を除き器内外に灰釉。胴部に「動輪紋」とその対角に「お茶」の文字。
8	角形茶瓶	(4.0)	10.3	5.9	素焼き。鋳込み底部対角線に継跡。器内面のみ灰釉。胴部に「茶」の文字。
9	徳利	3.6	10.5	6.6	素焼き。胴部ヘラ調整。ヘラ切り底。内面のみ施釉。
10	無記名土瓶	7.2	7.2	6.0	素焼き。胴部ヘラ調整。
11	小皿	4.1×3.2	1.2	—	底部に一条の沈線。側面に「○浜驛 崎陽軒」の文字。
12	蓋	13.6	3.5	7.1	鋳込み。内外面に灰釉。片部に「姫路」「ま〇」の文字。
13	鉢	(16.0)	5.8	6.0	素焼き。内面に鉄釉。
14	蓋	8.2	3.3	3.5	素焼き。
15	碗	9.3	7.5	4.6	素焼き。外面に「おしるこ」「はままつ駅〇〇 〇〇〇」の文字。

第2表 竹下遺跡(第2次)出土遺物観察表

(5)ま と め

今回の調査では、近代の水田面を確認したがその下層では礫層、大量の湧水があり、それ以前の生活痕跡を確認することはできなかった。しかし、大量に廃棄された汽車土瓶などが採取でき、日豊本線の歴史を伺い知る資料を得ることができた。

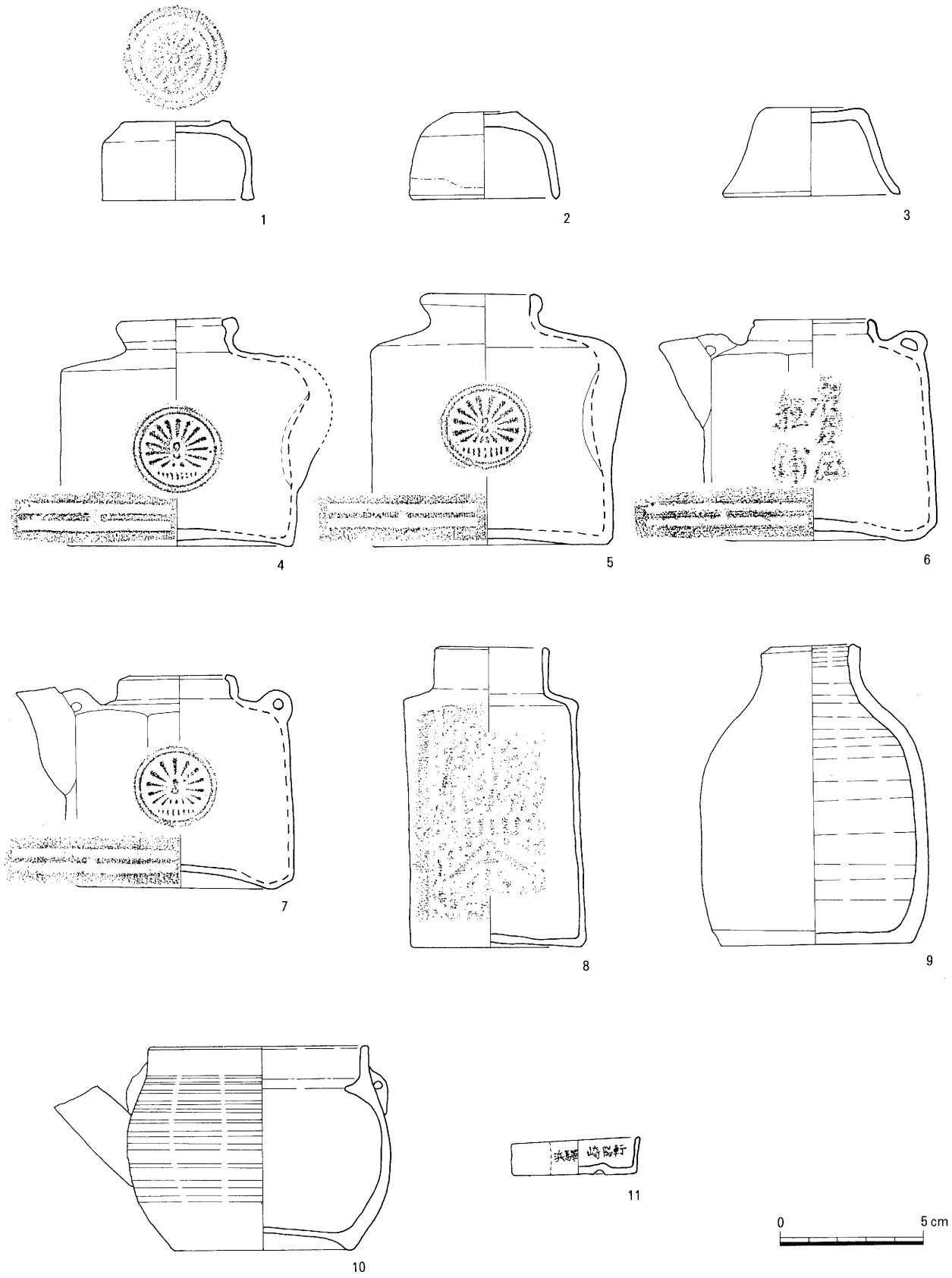


Fig. 7 竹下遺跡（第2次）出土遺物実測図1（1/2）

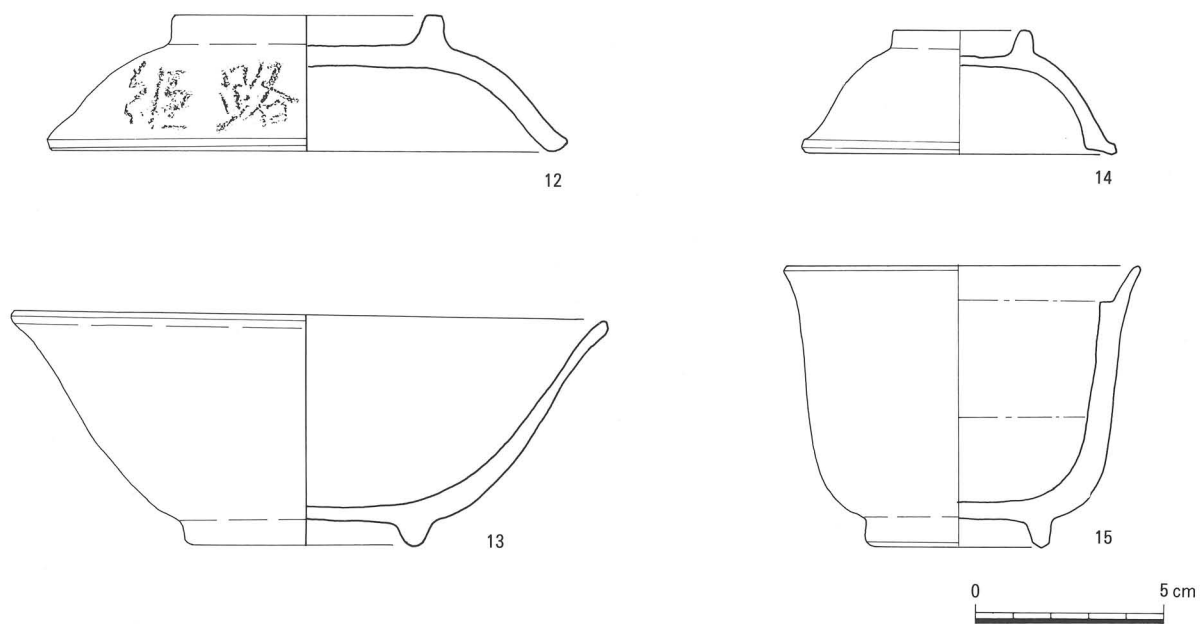


Fig. 8 竹下遺跡 (第 2 次) 出土遺物実測図 2 (1/2)



PL. 4 竹下遺跡 (第 2 次) 出土遺物

3. 延岡城下町遺跡（第1次）

所在地 延岡市南町1丁目3-3外
 調査原因 商業ビル建設
 調査期間 990511~990602

調査面積 136 m²
 担当者 山田
 処置 調査後破壊

(1)位置と環境

本遺跡は、延岡城が立地する城山の東側に位置し、標高約5mを測る。一帯は五ヶ瀬川と大瀬川の堆積作用によって形成された川中地区と呼ばれる中洲で、本市の中心市街地になっている。川中地区は、初代延岡藩主高橋元種による縣城（延岡城）築城の際に北町、中町と共に最初に整備された城下町である。内藤家文書によると、北町（東西百三十八間、道幅一間半）、中町（東西二百二十九間、道幅二間）、南町（東西百三十一間、道幅三間）、各々に道幅一間の横町があった記録が残っている。また、絵図史料には、間口が狭く奥行きが長い所謂短冊型の城下町が描かれ、江戸時代を通じて延岡藩の商業の中心地として栄えていたことが伺える。明治維新後、明治15年1月に川中地区では大火があり、北町、中町、南町、船倉町の建造物は三福寺など一部を除き474戸が焼失した。明治後期に城山公園から撮影された古写真（内藤記念館所蔵）によると、廃寺、合寺や寺の移転によって空いた土地に住宅や商店の進出が進んでいるものの短冊型の町並みや水堀、土塁など城下町の景観が残っていたようである。大正時代に入ると水堀（昭和54年、最後まで残っていた北大手門下の内堀が埋め立てられた）や船倉町から須崎町にかけての埋め立てが始まった。昭和8年の市政施行後、翌年度から内務省直轄事業として安賀多橋（同12年完成）、板田橋（同10年完成）の架け替え事業の着手により、市街地における区画整理事業の具体化が進み、南町、北町、中町、本町、船倉町、須崎町では第4土地区画整理事業として昭和9年10月から昭和15年7月まで約8haが実施されたが、昭和20年6月29日の延岡大空襲によってその殆どが焦土と化した。戦後、国の戦災復興事業都市指定による区画整理事業がスタートし、川中地区も昭和21年から同32年にかけて亀井通線の東側全域にわたり実施された。これにより城下町として風情を残す景観はなくなったが短冊型の町割りや寺の存在がその面影

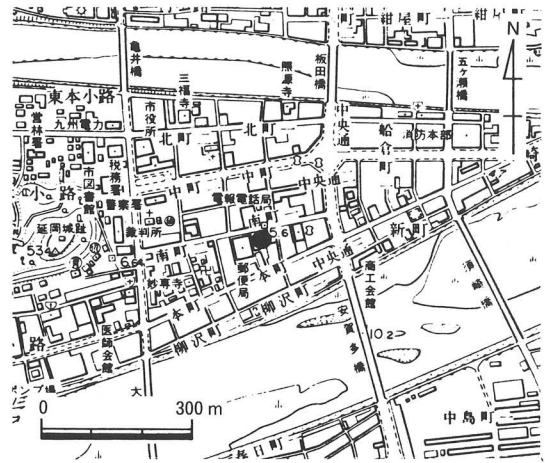
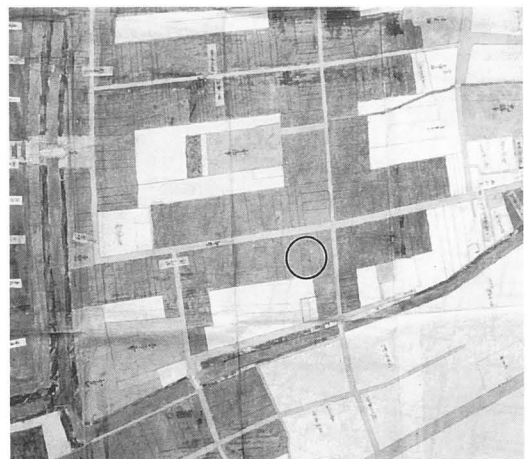


Fig. 9 延岡城下町遺跡（第1次）位置図（1/15,000）



PL. 5 延岡城下町遺跡（第1次）調査地



PL. 6 明治元年前後延岡藩士屋敷敷図（部分）
1868年・明治大学刊事博物館蔵

を止めている。周辺地域における文化財調査の記録は古く、江戸時代西ノ丸から土器が採集された記録が残っている。この他、戦後石川恒太郎によって城山公園の山裾から古墳時代の横穴墓の調査が行われている。昭和50年代以降、予定地の西側に隣接する延岡郵便局や市役所新館建設時に土器や掘跡が検出されている。近年では、中町シンボルロード整備事業の際、道路改良のため地表下約1.5メートルの掘り下げの際の立会調査で、弥生終末～古墳初頭の土器片を多数採集し、掘削土より近世の五輪塔の一部が採集されたりしている。また、野口記念館入口のポケットパーク整備事業（行膝の滝）の事前調査では、16世紀～19世紀の陶磁器類が出土している。

(2)調査の概要

本遺跡は、以前起きた火災で焼け残った店舗兼住居が残っていることから、家屋解体後に確認調査を行うこととした。また、予定地中央部には店舗の火薬保管庫として利用されていた石蔵があるが、非常に堅固な構造になっており解体が困難なため、この付近を外して行った。予定地区は、旧城下町の痕跡を示すように、南町通りと本町通り（旧堀跡）との間に、ほぼ南北方向に細長い区画で本町側が狭くなっている。このため、調査は、南町通り及び中央部付近を中心に3カ所のトレンチを設定して行った。

調査の結果、第1トレンチからは江戸時代の礎石建物跡1箇所、階段付き水路遺構1カ所が検出された。水路遺構は、礎石建物跡の真横に並行するように流れ、建物の南側端部を過ぎてから西側にややカーブして南側の堀（本町通り）方向に流れているようであった。階段遺構は4段確認された。1段目の両側石上面は、板状のものが設置できるように切り込みがあり、水路からの導水及び作業場としての機能を有していたものと思われる。また階段遺構の脇には大甕が設置されており、生活用水の貯水機能を有していたものと推察される。廃棄状況について、これらの遺構から炭化物や焼土が見受け



Fig.10 延岡城下町遺跡（第1次）調査区配置図（1/1,250）

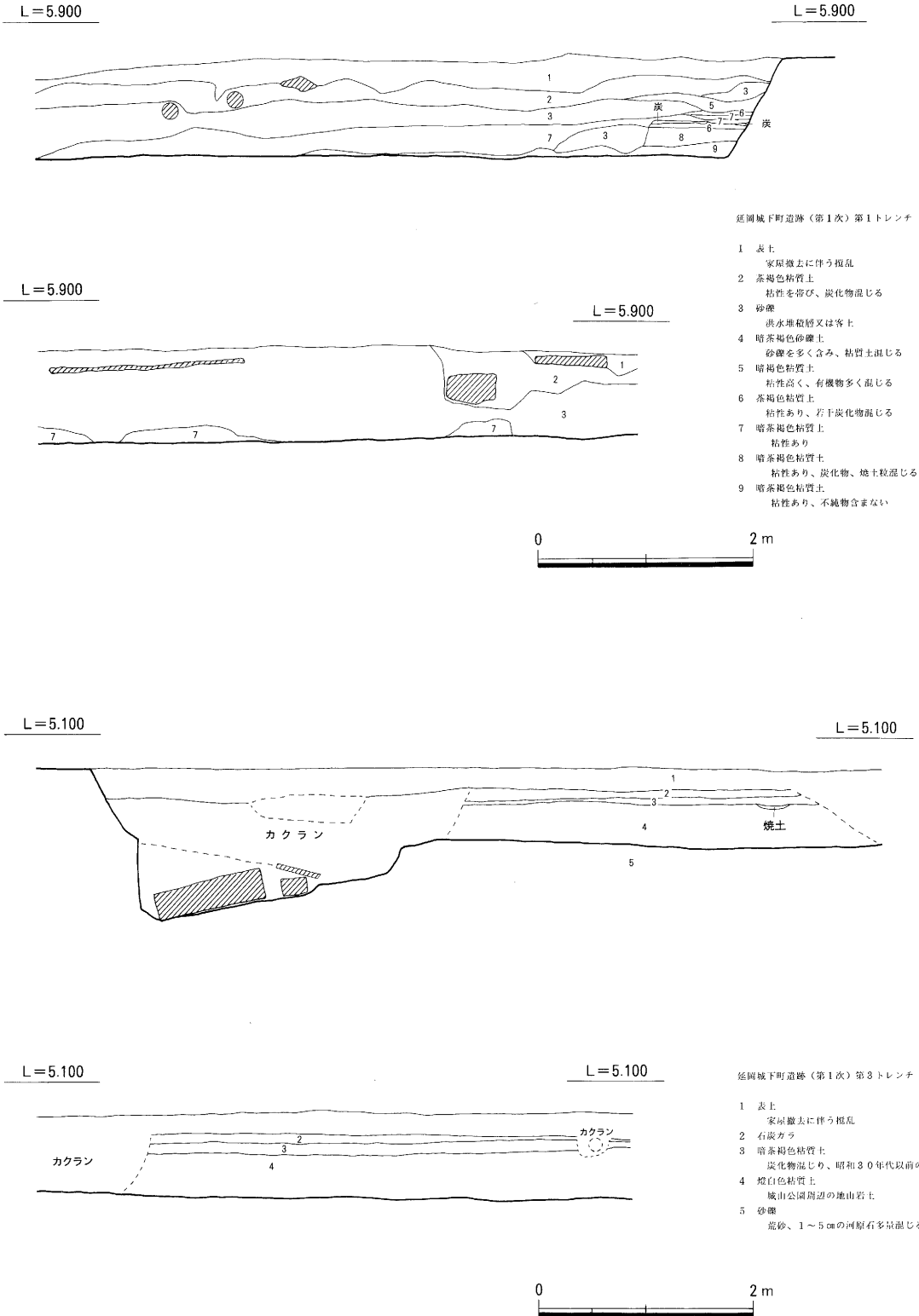


Fig.12 延岡城下町遺跡（第1次）第1・第3トレンチ土層断面図（1/60）

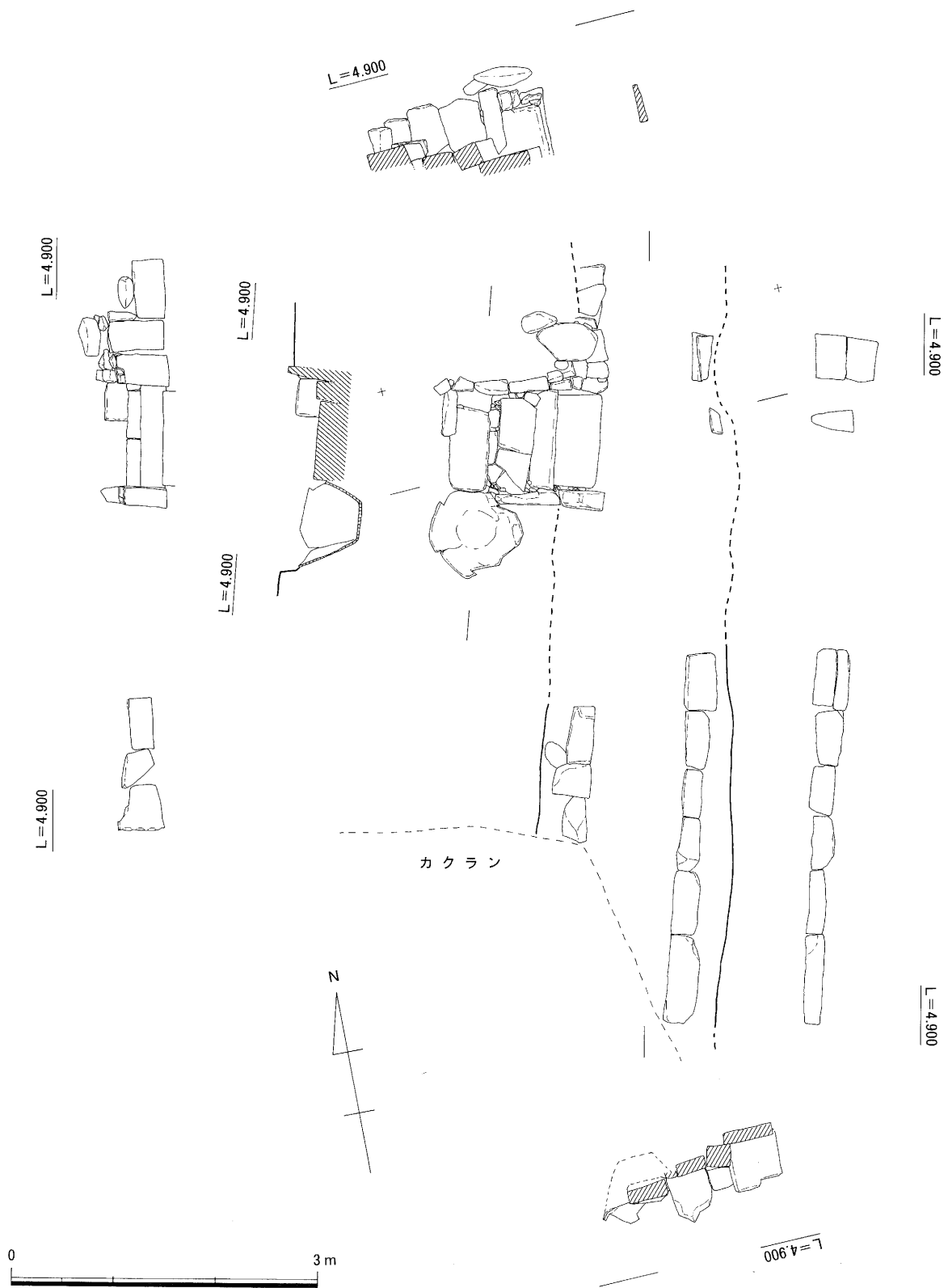


Fig.13 延岡城下町遺跡(第1次)第1トレンチ水路遺構実測図(1/60)

られ、その上に一気に堆積していることが観察されることから、明治15年に起きた大火後の整地によって廃棄されたことが判明した。この他、トレンチ北側の礎石建物跡付近を境に南西―北東方向ラインの北側が良好な明茶褐色粘質土に対して、南側が陶磁器・炭化物等の暗茶褐色粘質土及び砂礫層が見受けられることから、中洲であった一帯が近世城下町へ造成された痕跡若しくは石垣を伴う水路遺構の前段階の幅広い水路跡の存在を示しているもの推察される。

遺物について、1トレンチでは攪乱層や水路遺構から主に検出され、近現代の攪乱層除去後を暫定的に第1面、水路遺構検出面を第2面と設定し、17世紀～19世紀の肥前陶磁器、瀬戸美濃系陶磁器、関西系陶磁器（延岡の古城焼?含む）、瓦類が出土した。2トレンチは、表土攪乱層直下は砂層及び河原石の礫層が厚く堆積していた。3トレンチは表土攪乱層下は昭和20年6月29日の延岡大空襲に伴う焼土が検出され、その下層は砂層が確認された。焼土からは高熱により変形した「サクラビール」や、寛永通寶が検出された。

(3)検出遺構

1トレンチからは、南町の道路側から短冊型城下町の痕跡とみられる礎石建物跡1軒を検出した。トレンチが狭く全体像は不明だが間口二間、奥行き二間が確認された。また、建物跡の東側から本町側に延びる階段付き水路遺構1基が検出された。

3トレンチからは、攪乱や洪水堆積層、戦後の区画整理による石炭ガラの埋土が確認されたが、遺構は検出されなかった。

(4)出土遺物

1・3・4は、染付碗である。2は、関西系の碗である。内外面に貫入がみられ、他の延岡城関連遺跡でも数多く出土している。5・6は、蓋付染付碗のセットである。蓋のツマミ内側に「渦福」、内側に五弁花コンニャク印、碗の高台内面に「渦福」がある。7・8は、蓋付染付碗のセットである。外面にはサギに花模様が施されている。10は染付碗で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎがみられる。12は色絵染付碗である。内外面に若干の赤絵が残る。高台内面に「福」がある。13・14は燈明受皿で、14は台付きとなる。19・20は染付皿で見込みに五弁花コンニャク印、高台内面に「渦福」がみられる。22・23は染付皿で、22は内面に輪花模様、高台内面に「渦福」がある。26は、「寛永通寶」である。25・27～30は、ガラス製品である。何れも近現代のもので、27は用途不明のピン、28・29はインクピン、30は油ピンである。32・33は播鉢である。34は大甕である。上部は欠損のため全体は不明であるが、器高は110cm以上になるものと推定される。35～39は瓦類である。35は軒棧瓦で、左巴文及び唐草模様がみられる。平瓦の裏側には「寛政二戌歳 甄屋・・」の銘が刻まれている。36・37は平瓦で、それぞれの瓦当に「吉岡新右衛門」、「雨吉八」の刻印がある。「吉岡新右衛門」については、祝子町にある千光寺山門（平成8年度調査）からも発見されており、当時の瓦師の活動や流通状況を知るうえで注目される資料である。38は丸瓦で表面には「佐吉」の刻印がある。39は軒丸瓦で、珠文が省略され三巴文のみとなっている。40～42は何れも紅溪石硯関係のものである。40は、半成品で約2/3が欠損し、墨受けには墨の痕跡が残る。41は墨受けが無く、半製品とみられる。42は紅溪石原石から硯製作作用に加工された荒割り状態のもので、表面には幅約1cmのノミ痕が多数残っている。

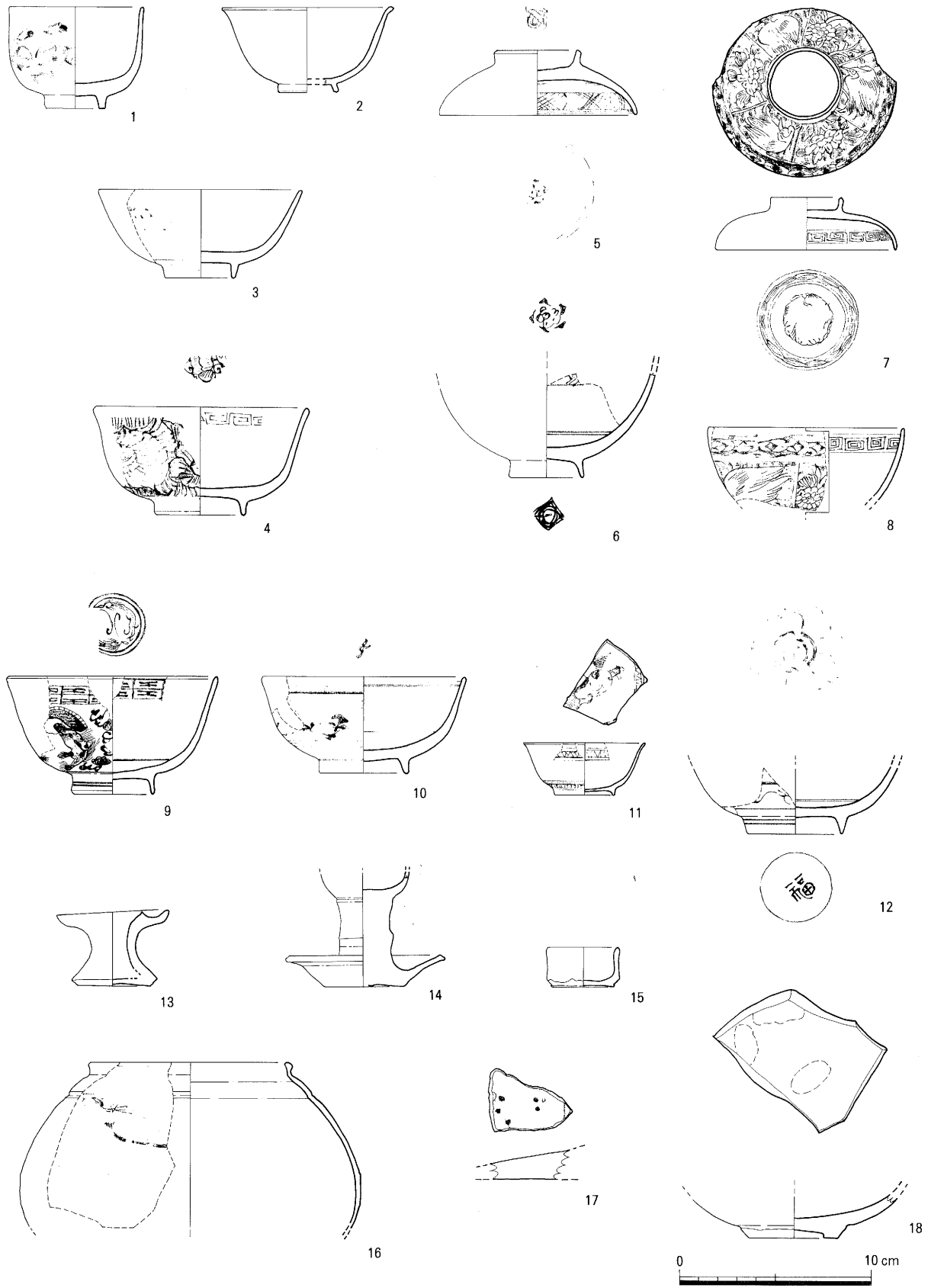


Fig.14 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図1 (1/3)

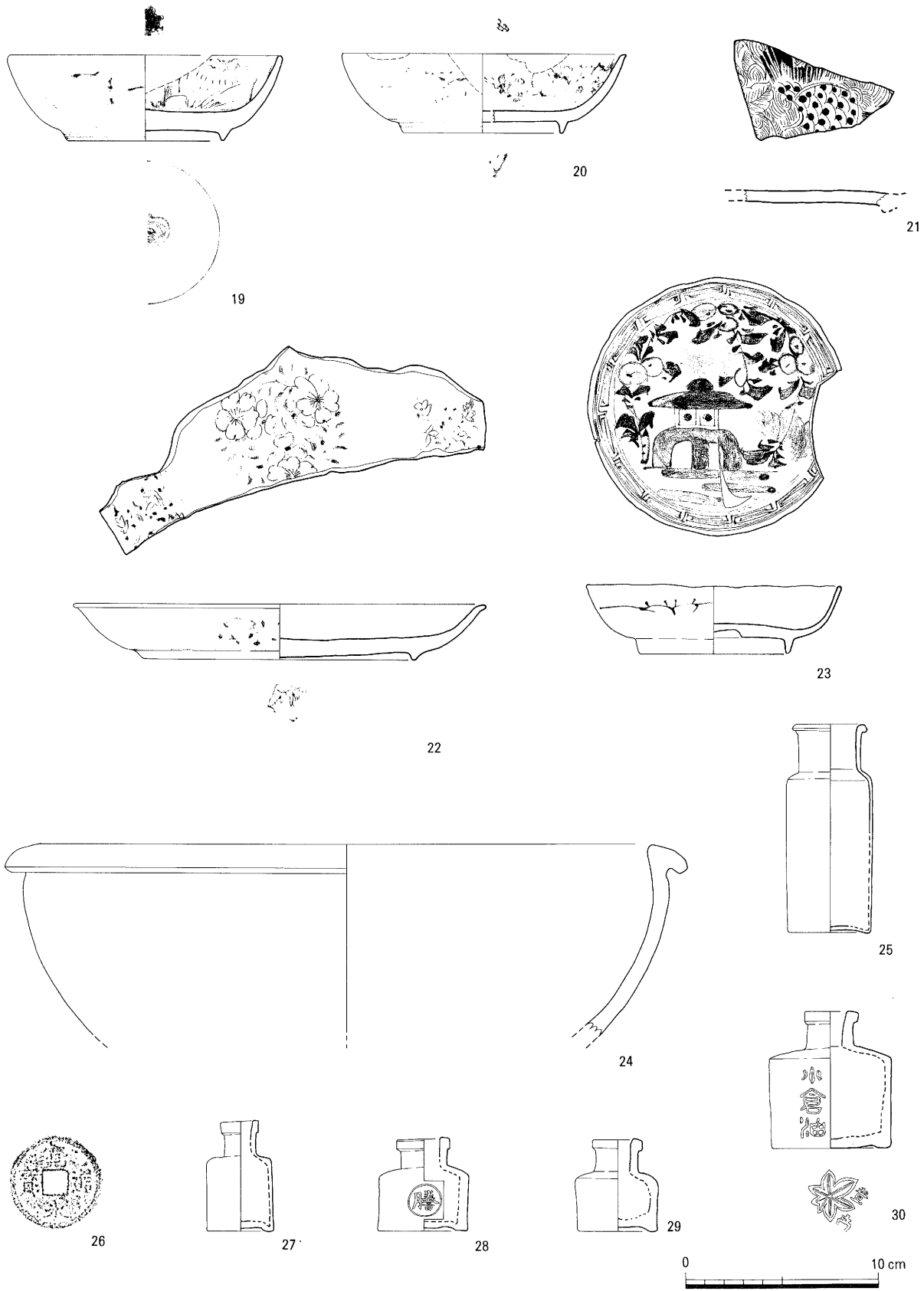


Fig.15 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図2 (1/3)

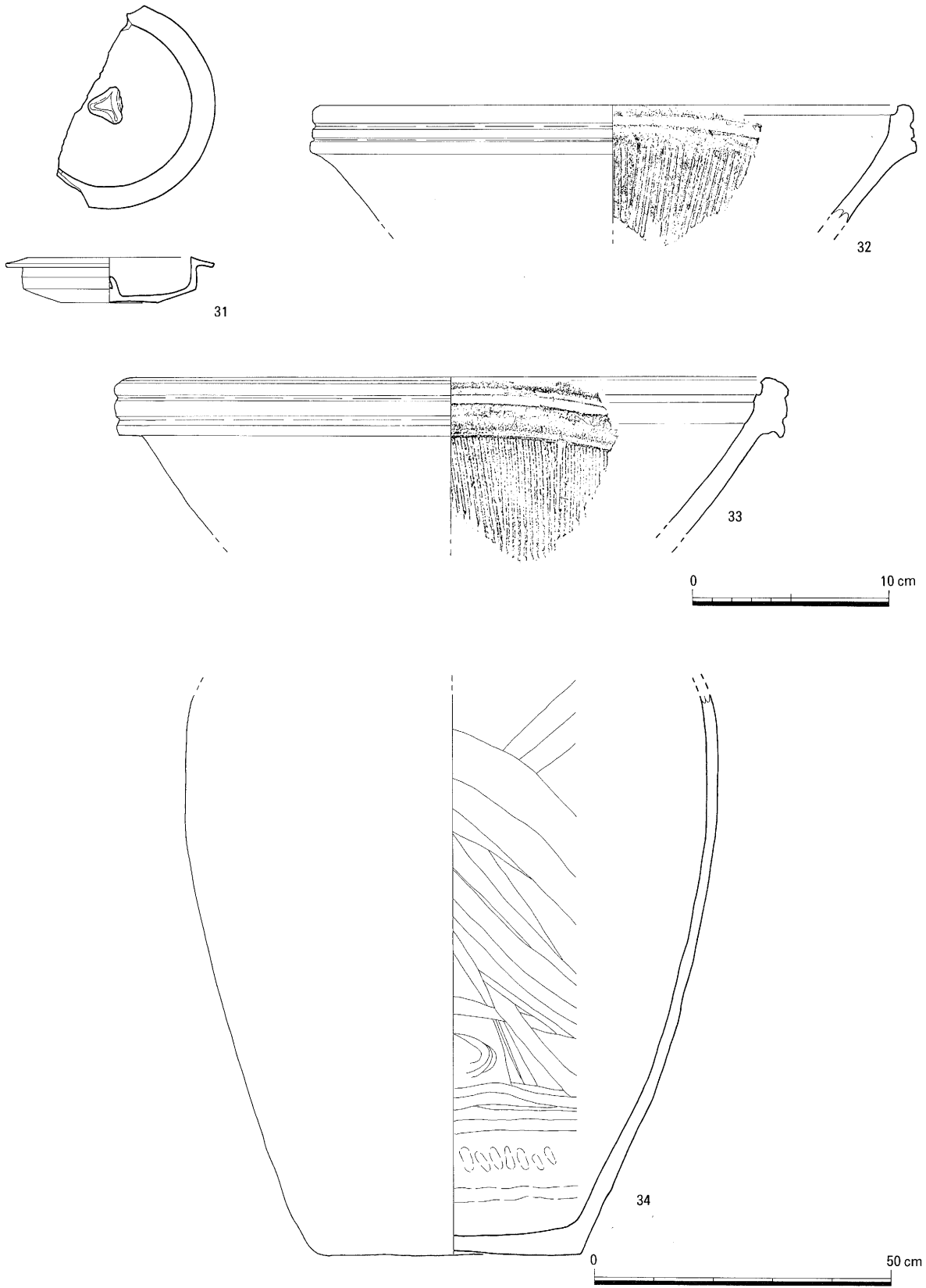


Fig.16 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図3 (31~33 = 1/3 34 = 1/10)

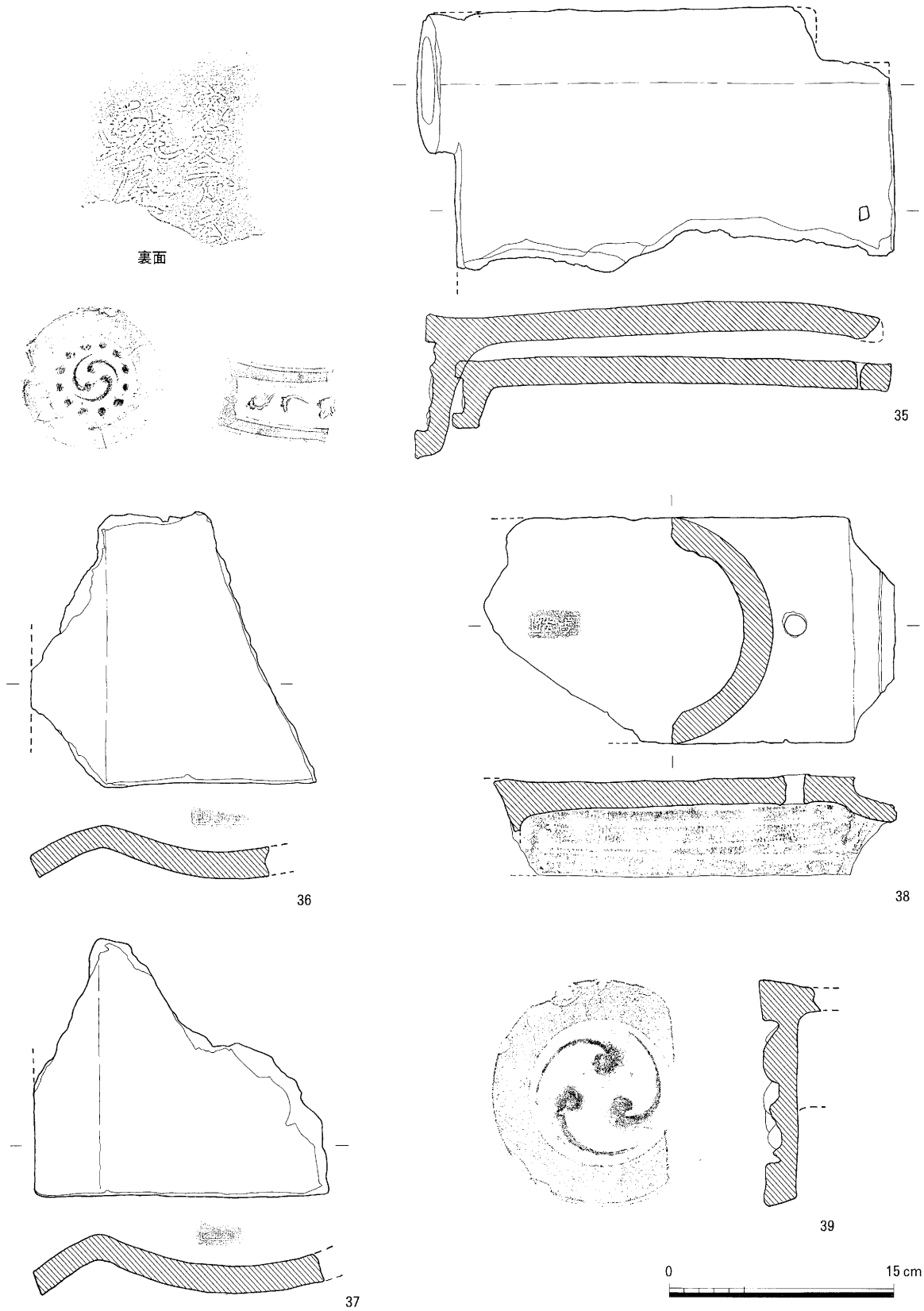


Fig.17 延岡城下町遺跡（第1次）出土遺物実測図4（1/4）

紅溪石硯について

江戸時代後期の安政年間頃（1854～1960）甲斐国出身の徳藏という修験者が修行していた。延岡藩領内の北川村八戸（北川町八戸）を通行中、北川の河川敷から石を拾い、近くの天神社に籠もり硯を作り延岡に伝わったのが最初とされる。延岡藩家老穂高亭々は、配下の川原新蔵に加工品を作らせ、硯材としての高い利用価値に着目し、航海方役所に対して大阪に移送するよう図った。廃藩後も川原新蔵などによって硯は製作され、「八戸石」や「赤石」と称されていた。明治10年の西南の役以後、延岡警察署長として赴任した佐藤暢（鹿児島県出身、後の栃木県知事）によって延岡名産「紅溪石硯」と命名された。佐藤は、後藤莊作（南町）秘蔵の唐硯端溪《石頼山陽（江戸時代の漢詩人、歴史家、（1780～1832）の遺品とされるもの》と遜色のないものと評価し、豪商那須助右衛門に硯の製造や原石の販売を提案し、早速硯の製造を開始し京阪神方面へ出荷を始めるに至った。消費地では好評であったことから、唐硯端溪石に因んで「紅溪石」として称されるようになった。ところが、東京の硯工から、紅溪石の特質である硬質性が製硯に不向きとの指摘を受け、一時廃業に追い込まれそうになった。しかし、明治32年（1899）宮内省（現宮内庁）御用師内海羊石の門下生であった原口梅羊によって傑作品が数多く作られたのを契機に、延岡の特産品「紅溪石硯」として流通するようになったとされている。

43～49は染付碗である。43は、口縁端部が外反し薄手に仕上げられている。外面には蝶に草花模様が施され高台内面に「大明年製」の銘款がみられる。44は、口縁端部が外反し内面見込み及び外面に松模様が施され、高台内に2

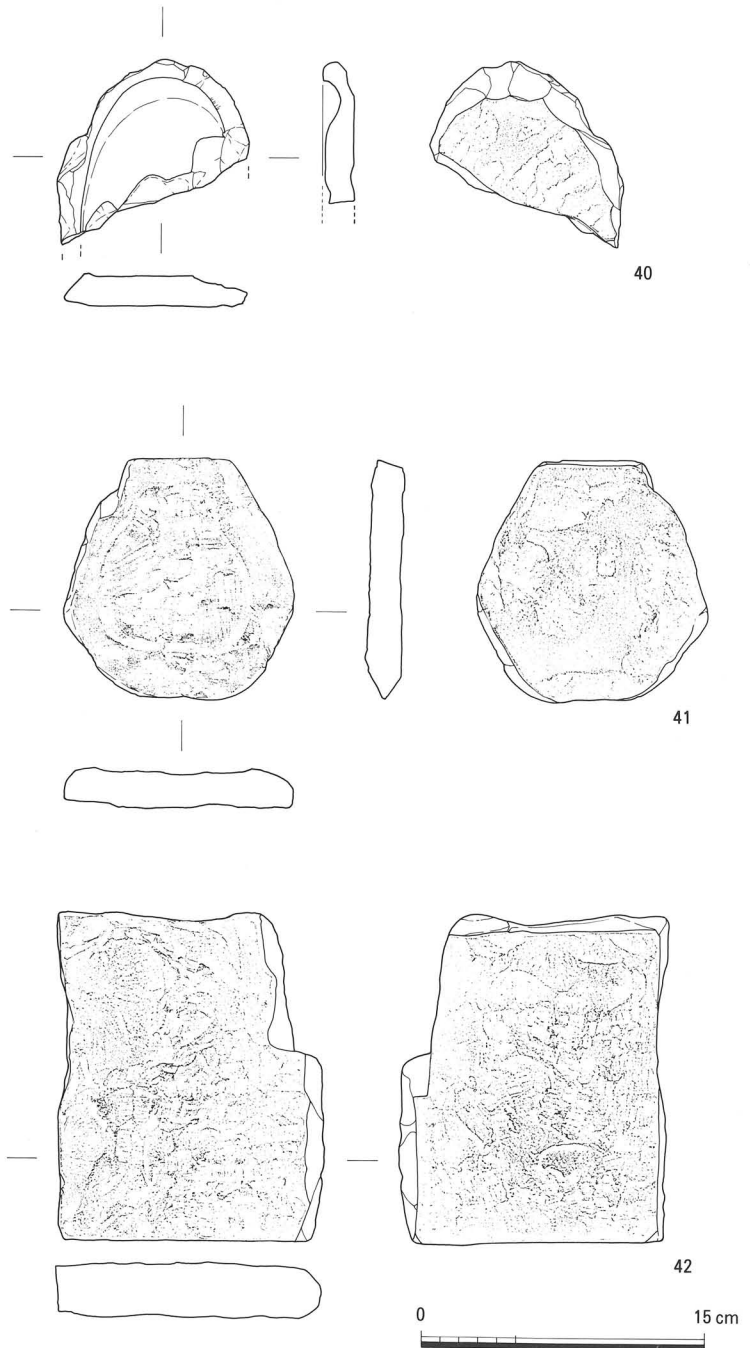


Fig.18 延岡城下町遺跡（第1次）出土遺物実測図5（1/4）



PL.7 延岡城下町遺跡（第1次）出土遺物1

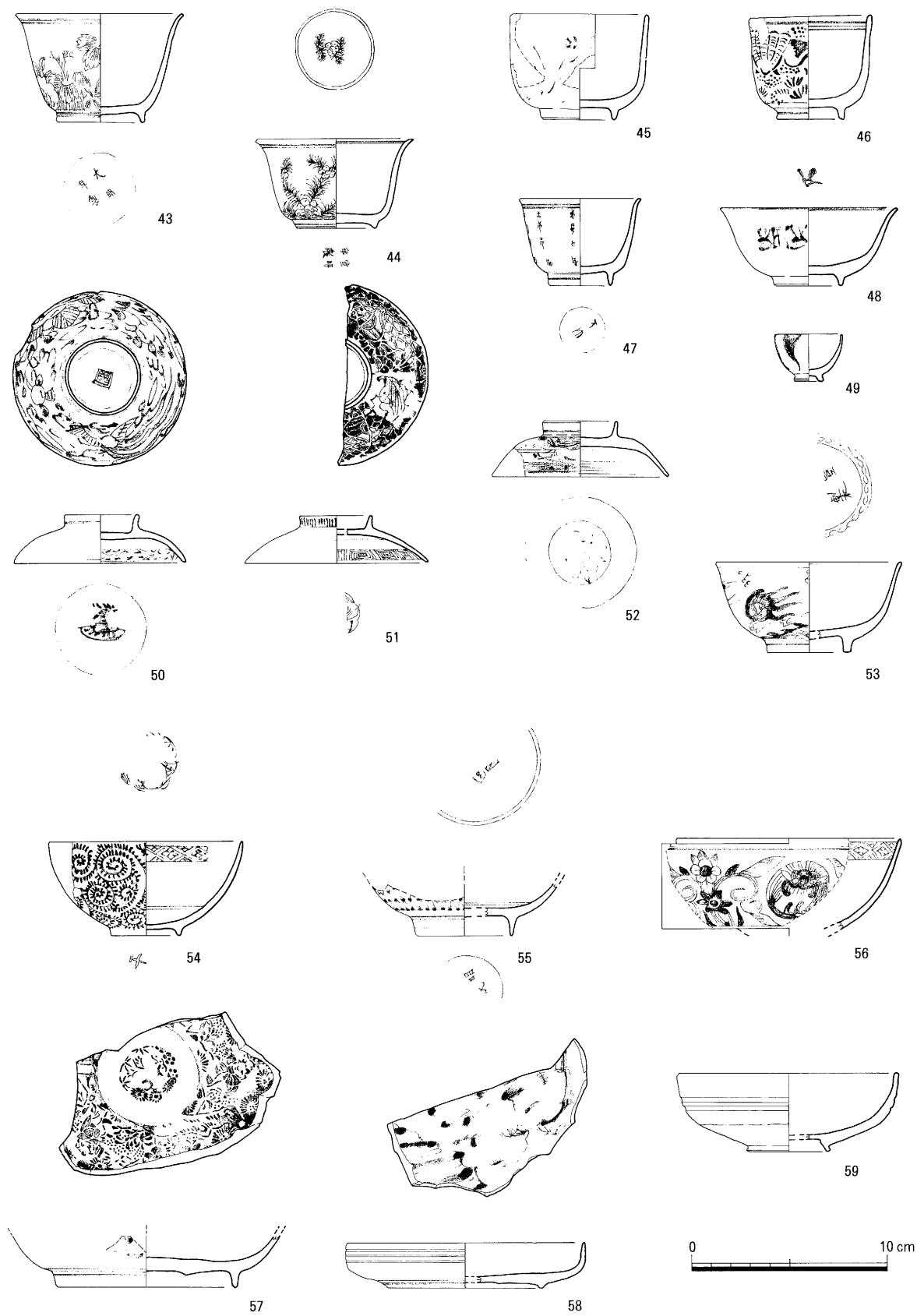


Fig.19 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図6 (1/3)

カ所の砂目積み痕がある。50～52は染付碗蓋である。50は、外面に鳥模様が施され、つまみ内側に「福」銘がある。53～56・59は染付碗である。53は、焼き継ぎ痕がみられ、見込みに「□□年製」の銘款がある。55は、高台内面に「大明年製」の銘款がある。57・58は染付皿である。58は、蛇ノ目釉剥ぎ凹高台をもつ。60は、行平鍋である。内面、把手、注口のみ施釉されている。61は、染付鉢である。高台内面は蛇ノ目釉剥ぎがみられる。62・63は染付大皿である。62は、焼き継ぎ痕があり内面にザクロ絵模様、高台内面に「□□年製」の銘款がみられる。

(5)ま と め

今回の調査は、面積、期間が制約された中で、これまで未解明な点が多かった近世の城下町の一端を伺い知ることのできる貴重な資料が得られ、数度にわたる区画整理事業が実施されているもの城下町遺構がある程度保存されていることが分かった。このことは、城と城下町とを一体化した構造解明の糸口となるもので、本市が現在進めている延岡城跡の国県指定史跡化に向けたデータ収集及び調査研究に弾みがつくものと期待される。また、今回の調査は中心市街地再開発に伴う初調査でもあり、今後の対応によっては周辺開発計画との調整が繁雑になることも予想され、開発者側に対する文化財保護行政のあり方等慎重に判断しながら進める必要がある。

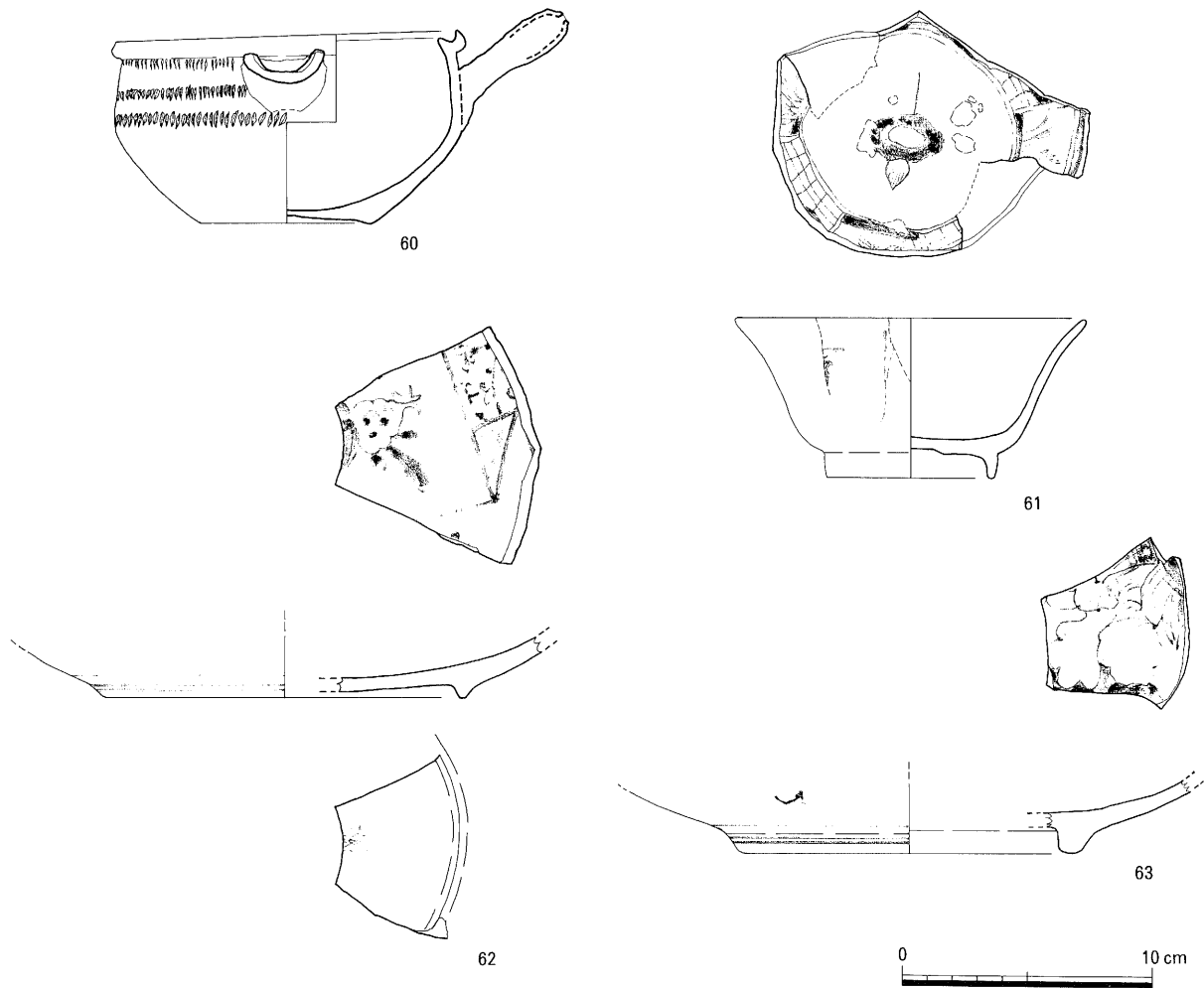


Fig.20 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物実測図7(1/3)



第1トレンチ調査状況



第1トレンチ遺構検出状況（東から）



第1トレンチ南北土層断面



第1トレンチ階段遺構検出状況



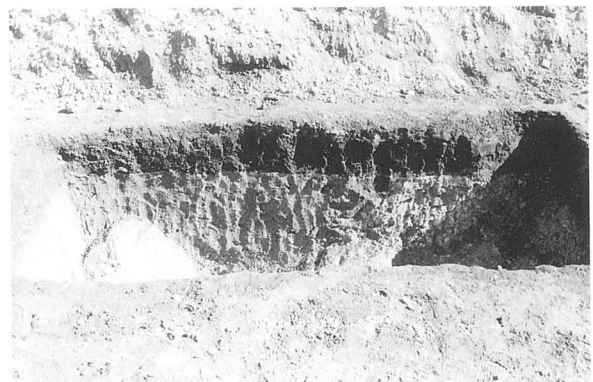
第1トレンチ遺構検出状況全景（南から）



第1トレンチ水路遺構検出状況（北から）



第1トレンチ階段遺構検出状況（西から）



第2トレンチ南北土層断面

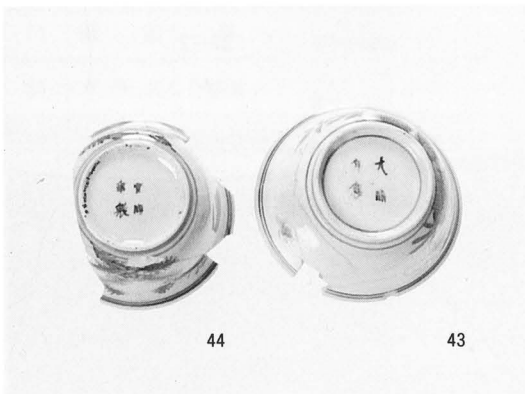
PL. 8 延岡城下町遺跡（第1次）調査風景



陶磁器類



寛永通寶



44

43



ガラス製品

PL. 9 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物 2



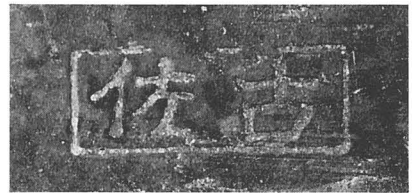
35-1



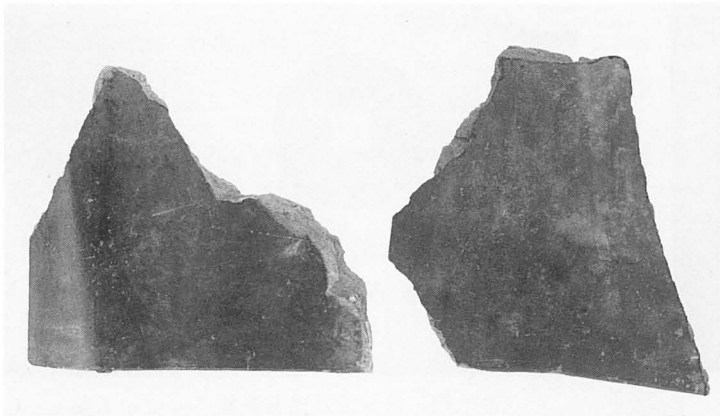
35-2



38-1



38-2



37-1

36-1



37-2



39



36-2

PL.10 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物 3

遺物 番号	種 別	器 種	出土地点	法 量			形 態 及 び 文 様	色 調		備 考
				口径	底径	器高		外 面	内 面	
1	磁 器	染付碗	1トレンチ No.2	6.8	3.0	5.3		淡灰色	淡灰色	肥前 17世紀
2	磁 器	碗	1トレンチ 2面一括	9.0	3.1	4.1	内外面とも貫入	淡黄色	淡黄色	関西系 18世紀後半~19世紀
3	磁 器	染付碗	1トレンチ 表採	10.6	3.6	4.6	見込み釉剥ぎ	淡灰色	淡灰色	18世紀
4	磁 器	染付碗	1トレンチ 1面一括	10.9	4.6	5.6	見込み・外面花模様	白 色	白 色	
5	磁 器	染付碗蓋	1トレンチ 1面一括	10.2		3.4	ツマミ内側に「渦福」 蓋内側にコンニャク印	青磁色	白 色	18世紀後半 No.6とセット
6	磁 器	染付碗	1トレンチ 2面水路		3.8		高台内面「渦福」	青磁色	白 色	18世紀後半
7	磁 器	染付碗蓋	1トレンチ 2面一括	9.1		2.7	サギに花模様	白 色	白 色	肥前 19世紀 No.8とセット
8	磁 器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	10.1			サギに花模様	白 色	白 色	肥前 19世紀
9	磁 器	染付碗	1トレンチ 1面一括	10.8	2.2	6.1	見込み模様あり	白 色	白 色	
10	磁 器	染付碗	1トレンチ 1面一括	10.2	4.5	5.1	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	淡灰色	淡灰色	18世紀
11	磁 器	染付碗	1トレンチ 1面一括	6.3	3.1	2.7	見込み猫文	白 色	白 色	関西系
12	磁 器	染付碗	1トレンチ 2面一括		4.9		内外面赤絵模様 高台内面「福」	灰 色	灰 色	
13	磁 器	灯明受皿	1トレンチ 1面一括	5.8	3.7	3.9	内外面貫入 底部無釉 高台内面「福」	淡緑黄色	淡緑黄色	19世紀
14	陶 器	灯明受皿	1トレンチ 2面一括	8.2	4.1	5.8	灰釉 底部無釉 台皿付	灰褐色	灰褐色	関西系
15	陶 器	小 杯	1トレンチ 1面一括	3.6	3.2	2.1	内外面貫入 底部無釉	淡黄色	淡黄色	関西系 玩具? 19世紀
16	磁 器	土 瓶	1トレンチ 2面水路	10.5		8.5	外面梅模様	明青灰褐色	明青灰褐色	関西系
17	陶 器	皿	1トレンチ 一括				鉄絵草花模様	灰褐色	灰褐色	唐津
18	磁 器	皿	1トレンチ 1面表採		4.6		外面無釉 内面3カ所砂付着	淡灰褐色	淡灰褐色	唐津
19	磁 器	染付皿	1トレンチ 2面水路	14.0	8.0	4.5	見込みコンニャク印 高台内面「渦福」	淡灰色	淡灰色	19世紀
20	磁 器	染付皿	1トレンチ 2面水路	14.6	8.2	4.1	見込みコンニャク印 高台内面「渦福」	淡 飴 色	淡 飴 色	19世紀
21	磁 器	染付大皿	1トレンチ 1面一括					白 色	白 色	19世紀前半
22	磁 器	染付皿	1トレンチ 2面水路	20.6	14.0	2.9	内面輪花模様 高台内面「渦福」	淡灰色	淡灰色	18世紀
23	磁 器	染付皿	1トレンチ 2面一括	13.0	7.6	3.5	内面灯籠に花模様 高台内面蛇ノ目釉剥ぎ	青磁色	白 色	19世紀
24	磁 器	鉢	1トレンチ 1面水路階段	31.5			内外面に灰釉	明 飴 色	明 飴 色	19世紀
25	ガ ラ ス	化粧ビン	1トレンチ 1面ビット6	3.5	4.2	10.7		透 明	透 明	昭和時代
26	古 銭	寛永通寶	3トレンチ 一括	2.4						18~19世紀
27	ガ ラ ス	ビ ン	1トレンチ 1面ビット6	1.7	3.4	5.7		透 明	透 明	昭和時代
28	ガ ラ ス	インクビン	1トレンチ 1面ビット6	1.6	4.6	4.7	外面に謄写インキの「謄」銘	透 明	透 明	昭和時代
29	ガ ラ ス	インクビン	1トレンチ 1面ビット6	2.0	4.0	4.7	内面にインク付着	緑 透 明	緑 透 明	昭和時代
30	ガ ラ ス	油 ビン	1トレンチ 1面ビット6	1.8	5.9	7.1	外面に「小倉油」・底部に 「登録商標」・紅葉	透 明	透 明	昭和時代
31	陶 器	瓶 蓋	1トレンチ 1面一括	8.2		2.3	内面鉄釉 外面無釉	赤茶褐色	茶 褐 色	19世紀
32	陶 器	挿 鉢	1トレンチ 2面水路階段	29.8				淡茶褐色	茶 褐 色	

第3表 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物観察表1

遺物番号	種別	器種	出土地点	法量			形態及び文様	色調		備考
				口径	底径	器高		外面	内面	
33	陶器	播鉢	1トレンチ 大甕裏込め	31.9				茶褐色	茶褐色	
34	陶器	大甕	1トレンチ 1面一括		43.0			小豆色	小豆色	19世紀
35	瓦	軒棧瓦	1トレンチ 1面一括				内面に「寛政二戌歳 甄屋…」銘	黒灰色	黒灰色	1790年
36	瓦	平瓦	1トレンチ 1面一括				瓦当に「吉岡新右衛門」刻印	黒灰色	黒灰色	19世紀
37	瓦	平瓦	1トレンチ 1面ビット6				瓦当に「雨吉八」刻印	黒灰色	黒灰色	19世紀
38	瓦	丸瓦	1トレンチ 1面ビット6				外面に「佐吉」刻印	黒灰色	黒灰色	19世紀
39	瓦	軒丸瓦	1トレンチ 1面ビット6	15.1				淡黒灰色	淡黒灰色	大正～昭和時代
40	石製品	紅溪石硯	1トレンチ 1面ビット6				硯面のみ整形 裏面はノミ痕	小豆色	小豆色	明治～昭和時代
41	石製品	紅溪石硯	1トレンチ 1面ビット20				半製品 内外面にノミ痕・擦痕	小豆色	小豆色	明治～昭和時代
42	石製品	紅溪石硯	1トレンチ 1面ビット20				初期作業段階 ノミ痕	小豆色	小豆色	明治～昭和時代
43	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路床面	8.5	4.4	5.5	外面蝶に草花模様 高台内面「大明年製」銘款	乳白色	乳白色	17世紀後半
44	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路床面	8.0	4.0	3.6	内面見込み・外面に松模様 高台内面「宣明年製」銘款	白色	白色	17世紀後半
45	磁器	染付碗	1トレンチ 1面水路階段	6.8	3.6	5.4	外面草花模様	淡灰色	淡灰色	19世紀
46	磁器	染付碗	1トレンチ 1面水路階段	6.1	3.3	5.3	型紙摺り	淡灰色	淡灰色	19世紀
47	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路一括	6.2	3.0	4.4	外面・高台内面に文字	白色	白色	19世紀
48	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	9.0	3.2	4.9	口縁端部に口サビ	白色	白色	瀬戸美濃 19世紀
49	磁器	染付小碗	1トレンチ 2面水路階段	3.4	1.5	2.4	焼成不良 外面に色絵痕	白色	白色	
50	磁器	染付碗蓋	1トレンチ 2面水路階段	8.6		2.5	ツマミ内側に「福」銘 外面鳥模様	白色	白色	19世紀
51	磁器	染付碗蓋	1トレンチ 2面水路一括	9.2		2.4	外面の一部型紙摺り	白色	白色	19世紀
52	磁器	染付碗蓋	1トレンチ 2面水路階段	8.8		2.9		白色	白色	19世紀
53	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	9.1	4.2	4.6	焼き継ぎ痕あり 見込み「□□年製」銘款	灰白色	灰白色	
54	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	9.7	3.4	4.8	外面唐草模様	白色	白色	19世紀
55	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路一括		4.8		高台内面「大明年製」銘款	白色	白色	
56	磁器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	11.3			外面唐草獅子模様	白色	白色	
57	磁器	染付皿	1トレンチ 2面水路一括		9.0		内面型紙摺り 高台内面蛇ノ目釉剥ぎ	白色	白色	19世紀
58	磁器	染付皿	1トレンチ 2面水路一括	12.1	7.8	2.3	蛇ノ目釉剥ぎ凹高台	淡青色	淡青色	
59	陶器	染付碗	1トレンチ 2面水路階段	11.2	4.3	4.0	内外面に褐釉	褐色	褐色	
60	陶器	行平鍋	1トレンチ 2面水路階段		6.9	7.4	内面・把手・注口のみ施釉	茶褐色	赤茶褐色	関西系 19世紀
61	磁器	染付鉢	1トレンチ 2面水路一括	13.7	6.6	6.4	高台内面蛇ノ目釉剥ぎ	淡青色	淡青色	19世紀
62	磁器	染付大皿	1トレンチ 2面水路階段		14.4		内面ザクロ絵模様、焼き継ぎ痕 高台内面「□□年製」銘款	淡青色	淡青色	18世紀
63	磁器	染付大皿	1トレンチ 2面水路一括		13.0			白色	白色	18～19世紀
64	ガラス	ビールビン	3トレンチ 一括				外面「サクラビール」銘 延岡大空襲による熱変形	黒茶褐色	黒茶褐色	写真図版のみ 昭和時代

第4表 延岡城下町遺跡(第1次)出土遺物観察表2

4. 竹下遺跡（第3次）

所在地 宮崎県延岡市浜町172-16外
調査原因 宅地造成
調査期間 991102

調査面積 72 m²
担当者 高浦
処置 破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、市街地の中南部にある標高251.2mを頂とする愛宕山の東裾に広がる水田地帯の一角にあたる。西側にはJR南延岡駅が所在する。この周辺は、平成9年度、今年度に試掘調査を実施しており、今回は今年度はじめに引き続き宅地造成の第2工区地にあたる。予定地は現在も水田が営まれている。

(2)調査の概要

調査はトレンチ調査法を採用した。この結果、現代の田面下50cmから近代の水田面を検出した。さらにその下層では小礫及び大きな雑木片が検出された。

これらの結果は、平成10年度に調査を実施した浜田遺跡と類似するもので、近くを流れる旧浜川の堆積物と推察された。また、最下層からは大量の湧水が見られた。

(3)検出遺構

近代の水田面を検出した。

(4)出土遺物

旧浜川の堆積物である自然木が出土した。

(5)ま と め

今回の調査及び周辺の調査結果から、浜川の歴史の変遷を知るうえでの資料が得られ、周辺地域における古環境解明の糸口になるものと思われる。

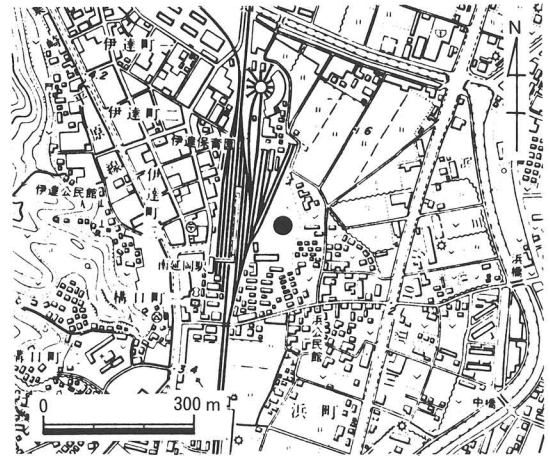


Fig.21 竹下遺跡（第3次）位置図（1/15,000）

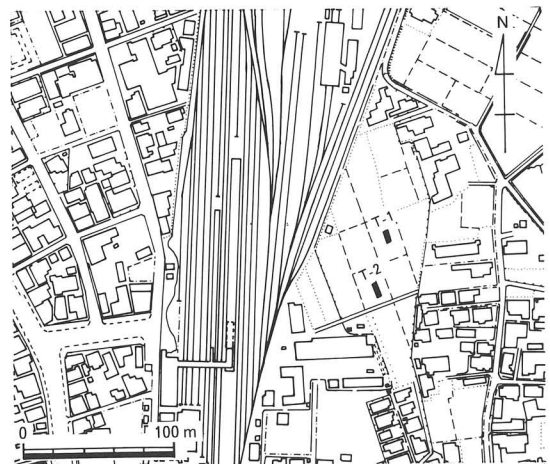


Fig.22 竹下遺跡（第3次）調査区配置図（1/5,000）



PL.11 竹下遺跡（第3次）調査風景

5. 天下城山遺跡（第1次）

所在地 宮崎県延岡市天下町593番地
 調査原因 携帯電話無線基地局
 調査期間 991115～991129

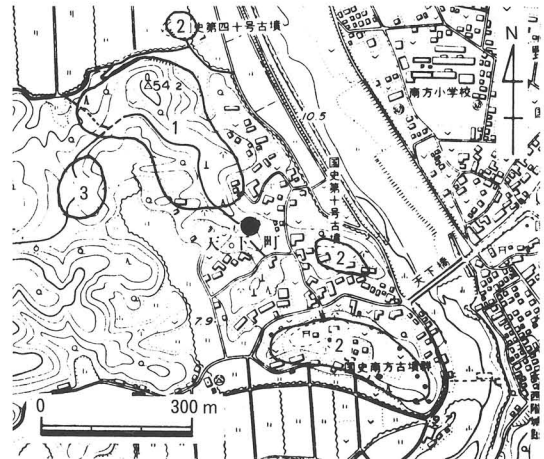
調査面積 50 m²
 担当者 尾方・高浦
 処置 破壊

(1)位置と環境

天下城山遺跡は、延岡市街地の西南部に位置し、標高54.2mを頂上とする丘陵の東西約380m、南北約300mを縄張りとする近年確認された中世の城郭である。現在、文献等調査中であるが、その詳細については未だ明らかになっていない。

これまで延岡市には4つの中世城郭が確認されており、在地豪族の土持氏が井上城（古城町）、西階城（西階町）、松尾城（松山町）と移ったと考えられていた。しかし、この天下城山の確認により、延岡市の中世史に大きな成果をもたらすものと思われる。

また、遺跡の位置する天下町は、天下古墳群（国史跡南方古墳群）・井の迫遺跡・天下第1・2遺跡等の数多くの古墳時代の遺跡が点在する地域でもある。



1. 天下城山遺跡 2. 国史跡南方古墳群
 3. 井の迫遺跡

Fig.23 天下城山遺跡(第1次)位置図(1/15,000)

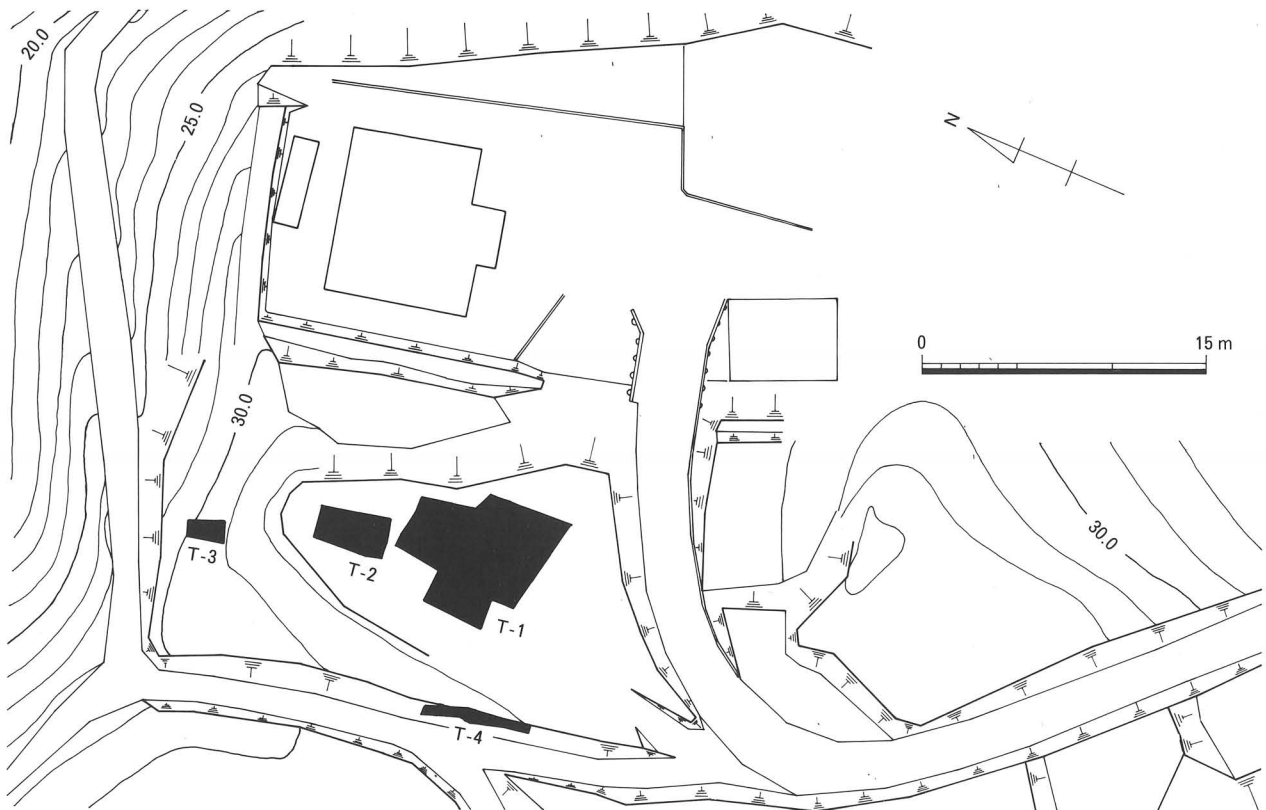


Fig.24 天下城山遺跡(第1次)調査区配置図(1/400)

(2)調査の概要

調査対象地は、周辺の地形から天下城山への進入口と思われる里道の西側で、以前は東側と連続した丘陵であったが、隣接する民家の取り付け道路建設の際切り離され、現在は独立した小丘陵となっている。丘陵上は開墾により狭い平坦部を形成している。

調査はトレンチ調査法を採用し、この平坦部に2箇所、丘陵裾斜面に2箇所設定し調査を実施した。

調査の結果、トレンチ1から溝状遺構1条を検出し、弥生土器半個体が出土した。トレンチ2からは、約1mの客土が確認され、開墾の際の造成によるものと考えられた。トレンチ3は、約70cm下から地山が確認された。

遺構の存在により埋蔵文化財が確認されたが、旧地形の残存が少ないこと、遺構の性格を確認するために範囲を拡張したが、詳細を把握するに至らなかった。



PL.12 天下城山遺跡(第1次)溝状遺構検出状況

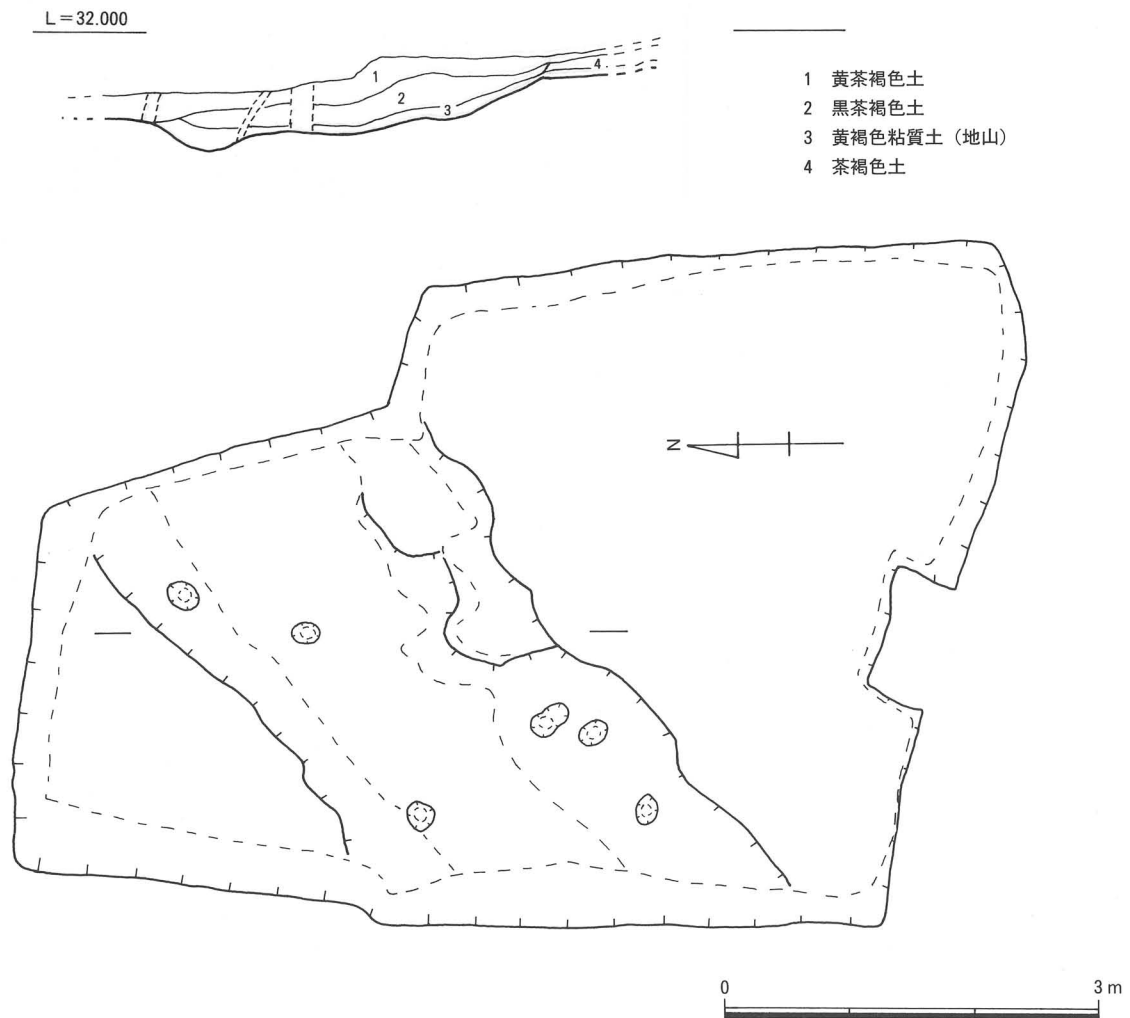


Fig.25 天下城山遺跡(第1次)溝状遺構実測図(1/60)

(3)検出遺構

溝状遺構1条を検出した。

(4)出土遺物

トレンチ1より弥生土器半個体を検出した。この甕形土器は、焼成、胎土ともに不良である。内・外面には一部不定方向にヘラ磨きが見られる。底部はナデ調整である。外面にはややすすが付着している。

(5)ま と め

今回の調査により確認された溝状遺構については、埋土の状況及び遺物の出土状況から弥生時代後期のもと思われる。しかし、その遺構の性格については後世の攪乱により一部しか残存しておらず、詳細に把握することができなかった。また、予想された天下城山に関する遺構の存在も確認できず残念な結果であった。

ここ、天下町、隣接する吉野町は高速道路路線の予定地であり、今後開発の増加が予想される地区である。今後起こりうる開発に対し、注意を要さねばならない。

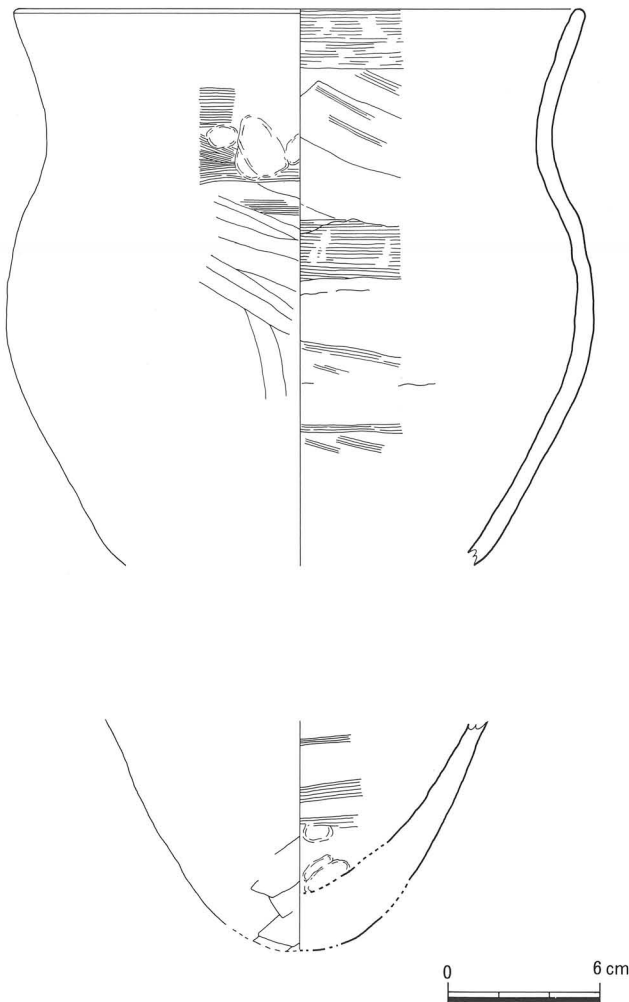
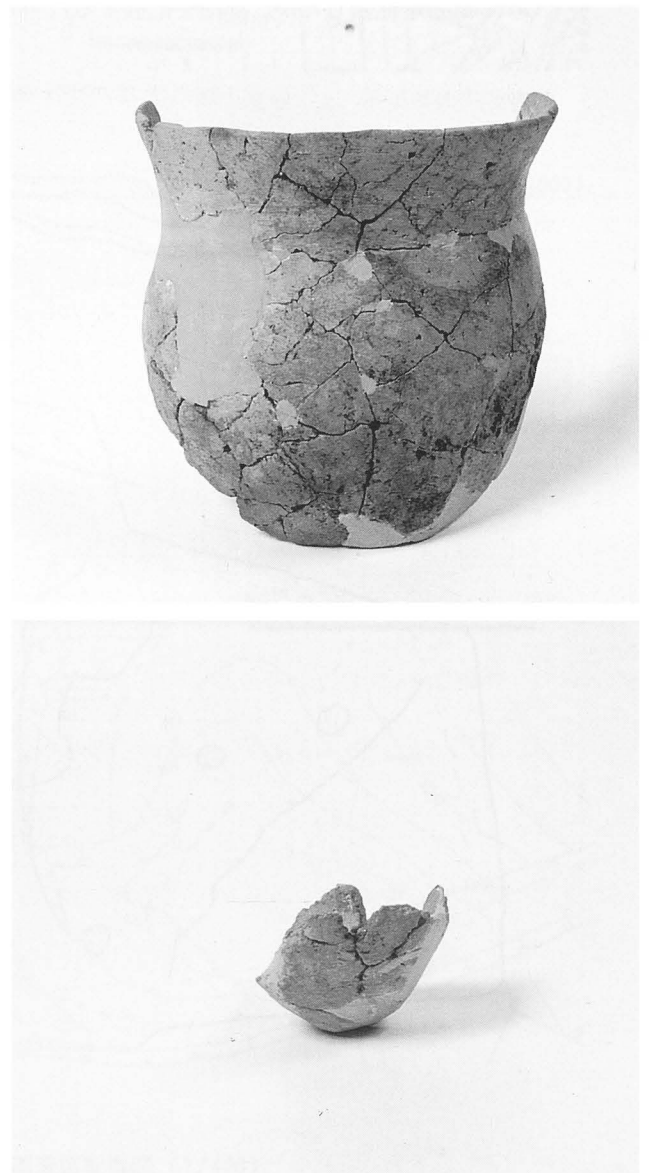


Fig.26 天下城山遺跡(第1次)出土遺物実測図(1/3)



PL.13 天下城山遺跡(第1次)出土遺物

6. 吉野遺跡（第5次）

所在地 延岡市吉野町1506
調査原因 宅地造成
調査期間 000126～000204

調査面積 6.5 m²
担当者 山田
処置 破壊

(1)位置と環境

本遺跡は、延岡市吉野町字吉野に所在する。市街地から約4km程西方にある丘陵上に位置し、同丘陵には国史跡南方古墳群第14～16号墳が点在している。また、予定地東側には、延岡（縣）を支配していた土持氏の供養塔である卒塔婆（1482年銘・平成12年4月市有形文化財指定予定）が所在し、一帯は関連する光福寺跡の伝承地ともなっている。近年、周辺地区では広域農道改良に伴う吉野遺跡（1次・平成2年度調査・旧石器時代～平安時代、剥片、石核、三稜尖頭器、集石遺構、土墳墓、土壇）をはじめ、吉野遺跡B地点（2次・平成4年度調査・組合せ式石棺）、吉野遺跡C地点（3次・平成4年度調査・畑地復旧）などの調査が行われた他、同丘陵北側では、クレアパーク整備に伴う今井野遺跡群の調査が進められている。平成11年12月、延岡市土地開発公社から国道10号延岡道路建設工事に絡む家屋移転用地に関連して文化財の有無に関する照会を受けた。予定地は吉野第2遺跡（4052）として周知の埋蔵文化財包蔵地となっていることから協議を行い、市教委において確認調査を実施することとなった。

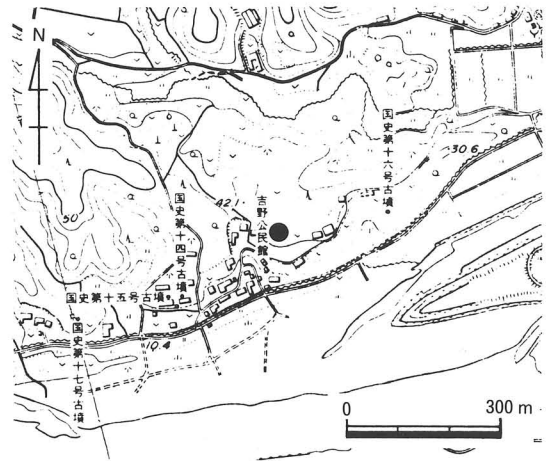


Fig.27 吉野遺跡（第5次）位置図（1/15,000）



PL.14 吉野遺跡（第5次）調査地

(2)調査の概要

調査は、既に進められている予定地南側の石垣工事を避け、2カ所のトレンチを設定して行った。調査の結果、表土直下は、地山の風化土とみられる明茶褐色粘土層が検出され、以前の基盤整備等によって包含層を含む地層が大規模に削平されていることが判った。

(3)検出遺構

なし

(4)出土遺物

なし

(5)まとめ

今回の調査では、予想を上回る削平のため成果が得られなかった。しかし、東側隣接地において国道10号延岡道路建設に伴う発掘調査が予想されることから、旧地形の復元も含めて調査の推移に注目すべきであろう。

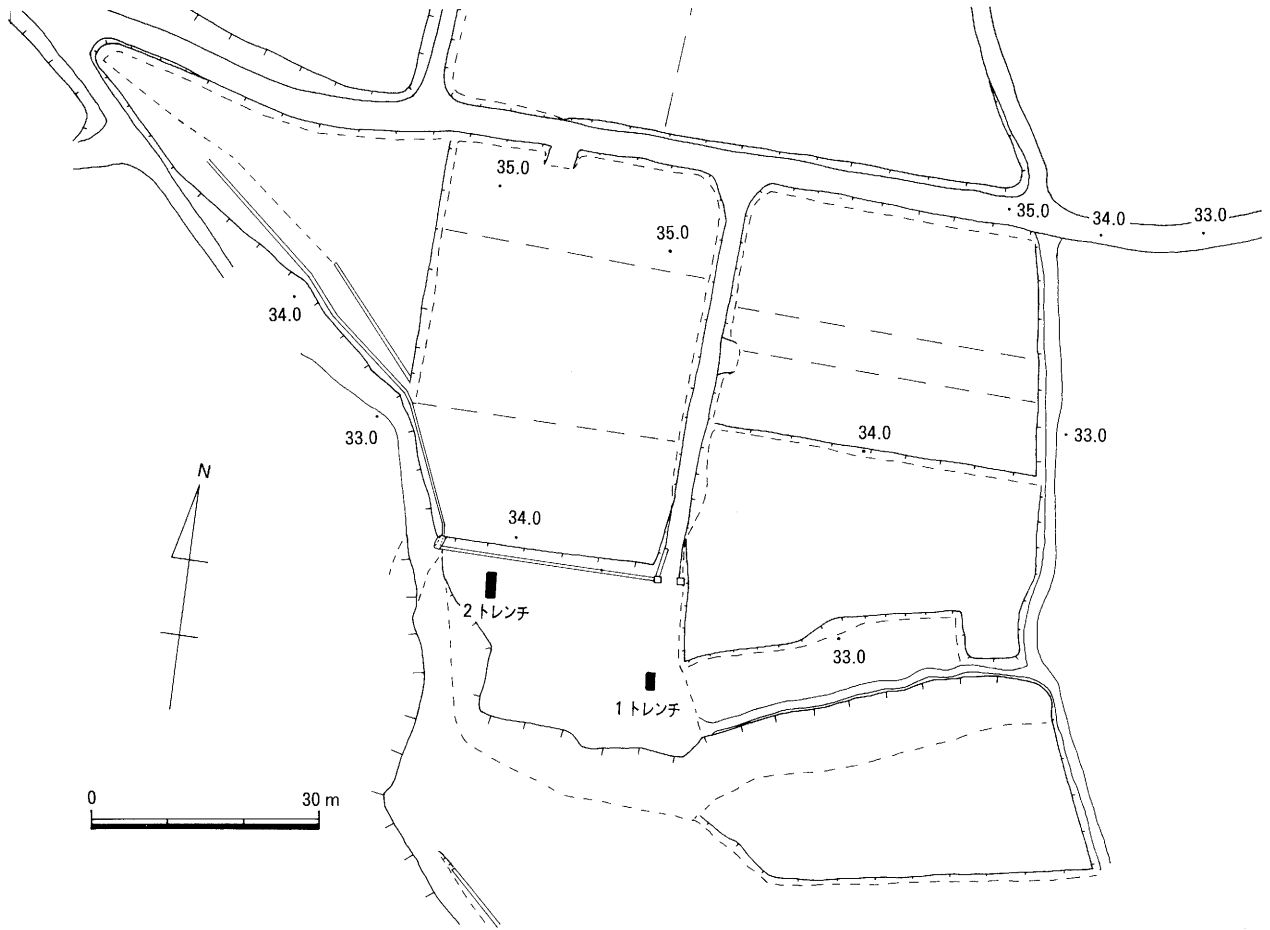
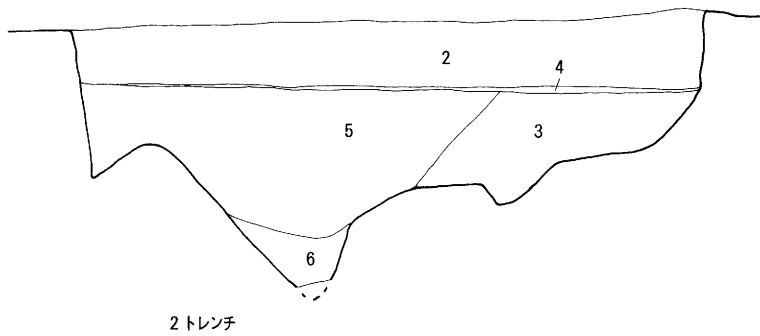


Fig.28 吉野遺跡(第5次)調査区配置図(1/1,000)

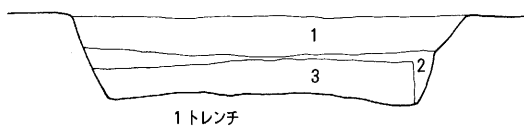
L=33.000



2トレンチ

- 1 客土
石垣工事のため搬入された岩土
- 2 耕作土
- 3 赤白色岩質土
粘土質風化土に1~3ミリの小石が混入し、
やや柔らかく赤味を帯びる
- 4 赤白色岩土
地山岩の小粒
基盤整備の整地面
- 5 暗茶褐色粘質土
粘性高く、地山岩の小粒混じる
基盤整備による二次堆積物
- 6 赤白色岩質土
基盤整備に伴う3の二次堆積物

L=32.900



1トレンチ

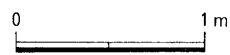


Fig.29 吉野遺跡(第5次)第2トレンチ土層断面図(1/40)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いまいの たけした のべおかじょうかまち たけした あもりじょんやま よしの
書名	今井野遺跡群(第4次) 竹下遺跡(第2次) 延岡城下町遺跡(第1次) 竹下遺跡(第3次) 天下城山遺跡(第1次) 吉野遺跡(第5次)
副書名	平成11年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
著者名	山田 聡、尾方農一、高浦 哲
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いまいのいせまぐん 今井野遺跡群 (第4次)	のべおかしあもりまち 延岡市天下町 あざいまいの 字今井野	452033	4041	32° 34′ 11″	131° 37′ 11″	990210) 990222	232 m ²	防災工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	旧石器	溝状遺構		縄文土器片				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけした 竹下遺跡 (第2次)	のべおかしはままち 延岡市浜町 あざたけした 字竹下	452033		32° 33′ 28″	131° 40′ 50″	990420) 990422	160 m ²	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	近代	無		陶磁器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のべおかじょうかまち 延岡城下町遺跡 (第1次)	のべおかしあのみまち 延岡市南町 あざあのみまち 字南町	452033	3026	32° 33′ 38″	131° 40′ 11″	990511) 990602	136 m ²	商業ビル建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡	近世	水路跡、建物跡		陶磁器、瓦				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけした 竹下遺跡 (第3次)	のべおかしはままち 延岡市浜町 あざたけした 字竹下	452033		32° 33′ 24″	131° 40′ 50″	991102	72 m ²	
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	近代	無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あもりじょんやま 天下城山遺跡 (第1次)	のべおかしあもりまち 延岡市天下町 あざあもり 字雨下	452033	4063	32° 34′ 16″	131° 37′ 52″	991115) 991129	50 m ²	携帯電話無線
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城跡	中世	溝状遺構		弥生土器				

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よしの 吉野遺跡 (第5次)	のべおかしよしのまち 延岡市吉野町 よしの 字吉野	452033		32° 33′ 51″	131° 37′ 31″	000126) 000204	6.5 m ²	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	無		無				